

平成16年第11回教育委員会記録

平成16年7月28日(水)

杉並区教育委員会

教育委員会記録

日時 平成16年7月28日(水)午後2時02分～午後5時01分
場所 教育委員会室

出席委員 委員長 丸田 頼一 委員 長 大藏 雄之助
委員 宮坂 公夫 職務代理者 委員 安本 ゆみ
教育長 納富 善朗

欠席委員 (なし)

出席説明員 事務局次長 佐藤 博 継
学校適正配置担当部長 上原 和義 庶務課長 和田 義広
学校運営課長 馬場 誠一 学務課長 井口 順司
学校適正配置担当課長 吉田 順之 指導室長 松岡 敬明
施設課長
中央図書館長 倉田 征壽
中央図書館長 清水 文男

事務局職員 庶務係長 小今井 七洋 法規担当係長 石井 康宏
担当書記 佐藤 守

傍聴者数 20名

会議に付した事件

(議案)

議案第42号 小学校教科用図書及び107条教科書の採択について

目 次

会議録署名委員の指名について・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

議案審議

議案第 42 号 小学校教科用図書及び 107 条教科書の採択について・・・ 3

委員長 定刻を過ぎましたので、ただいまから第11回教育委員会定例委員会を開催いたします。皆様方、ご多忙のところ、またお暑いところお集まりいただきましてありがとうございます。どうぞよろしく願いいたします。本日の議事録の署名委員は宮坂委員にお願いいたします。本日の議事日程は、ご案内いたしましたとおり、議案が1件となっております。

今日は、傍聴の皆さんがたくさんいらっしゃるわけですが、開会に先だって皆様方に申し上げます。会議における言論について、批評を加えたり、賛否を表明したり、私語・雑談などをされないようご協力のほどよろしく願いいたします。

本日は、小学校教科用図書及び107条教科書、養護学校、心身障害学級用教科用図書の採択につきまして審議いたします。審議の方法ですが、小学校教科用図書につきましては、教科ごとに審議を行い、議論が出尽くした段階で決定をし、順次、次の教科に進めさせていただきます。採択の議決につきましては、教科ごとの全ての審議が終了した段階で、採択本を確認するために休憩を行いまして、再開後一括して行います。107条教科書の採択につきましては、107条教科書調査委員会からの報告に基づき審議を行い、採択を行います。以上の点よろしいでしょうか。

(「了承」の声)

委員長 審議に当たっては、出版社名を明らかにして発言していただきますようお願い申し上げます。まず、小学校の国語から始めます。ご意見をお願い申し上げます。

大蔵委員 国語については、5つの中から1つを選ぶのですけれども、どれにも共通して言える問題というのがありますので、それを最初に言わせてください。杉並区の教育委員会は非常に注目されておりますので、ここでいろいろ発言したことは、ほかにも報道されるかもしれませんし、影響があるかもしれません。それを考えながら、是非ほかの所でもお考えいただきたいし、教科書会社にもお考えをいただきたいというつもりで、いくつか共通のことを最初に言いたいと思います。

1つは、1年生のときから翻訳というのが出てくるのです。翻訳は、森鷗外の翻訳のように、原作をしのぐと言われるものもありますが、基本的には、翻訳の過程でいろいろ失われるものもあります。特に小学校の低学年などでは、日本人が書いたもののほうがいいと私は思います。翻訳を出さなければならない必然性は、非常に薄いと思いますので、日本人が書いた良い文章、やさしい1年生にふさわしいものを2年生ぐらいまではやったほうがいいというのが1つです。

もう1つは、特定の人作品がたくさん出てきます。どの教科書もそうですけれども、1つの会社の教科書に同じ人が、1年生に出てきたり、3年生に出てきたり、4年生に出てきたりと、何回も出てくるのです。その中に、例えば、宮沢賢治とかそういう人のように、もう評価がきち

っと定まっているもので、非常にたくさんのお子どもたちが、読みたがっているものが出てくるのならば、それは許容できると思いますけれども、まだそういうふうになっていない、普通の人知らないような人の作品や作者が何回も出てくるのはあまりよくない。できるだけバラエティーを多くして、いろいろな人の作品があるということをお子どもたちにもわからせたほうが良いと思います。

もう一つは、どの本にも古典として『竹取物語』が挙げられています。『竹取物語』の初めの書出しは非常にやさしいです。だからそれを採っているのだと思いますが、実は、このすぐその後に、係り結びが出てきて「なむありける」というのが2回出てくるのです。どの本も、採用しているものには2回出てきます。係り結びになると面倒くさい。その前の所には「けり」で出ているのに、どうして「ける」になるのかとか、そんなことの説明は面倒くさい。そういうことからすると、言葉そのものは少し難しくても、そういう文法的な引っかかりのないもののほうが良いだろうと思います。そういうことを是非考えていただきたい。

さらに言えば、戦争ものが出てきます。戦争の記憶を風化させたくないというのは結構なことですが、戦争の悲しさだとか悲惨さだとか、これを繰り返すべきではないということを強調するための作品として取り上げているものが、必ずしもそんなに感動的でもないし、この作品でなくてはならないということはないのではないかと思います。

例えば、昔は教科書に出ていたと思いますが、戦争中に食糧が無くなってきて、爆撃で動物が暴れると困るということで、上野動物園の象を殺した話があります。象に毒を入れて殺そうとすると象は食べない。餌をやらないでいると、象は一生懸命芸をする。芸をすれば何かもらえと思ってやる。そしてだんだん痩せほそって、ガクンと音をたてて倒れる。こういうものは誰が聞いてもわかるし、どの子どもでも分かることなのです。

それに比べて、誰かのお父さんが戦争に行き死んだという話というのは、交通事故でお父さんを亡くすこともあるでしょうし、いろいろなことで特殊性が少し出てきます。みんなに感動的に訴え、みんなが戦争ということを考え、こんなことを繰り返してはならないというような物語を採用するほうが、子どもにもアピールするし、将来残っていくと思います。そういうものについての取り上げ方というのは、この5冊すべての教科書に共通して、教科書編集者なり執筆者なりに考えていただきたい問題です。

個々について、東京書籍から順番にごく簡単に言います。東京書籍のものは非常によく出来ている教科書で、いろいろな所から推薦され、今までにも採用されていることが多いので、東京書籍について、問題のあるほうをある程度言っておきたいと思います。今、最初に言ったのは全部そうですが、例えば、1年生の下巻に外国郵便が出てきます。私は、国内郵便のほうが先だと思

いますが、外国郵便が出てくるのです。封筒が出てきて、左の上に切手が貼ってあります。外国郵便の場合、右の上の所に切手を貼るとというのが規則になっております。左に貼るのは異例のことなのです。そういうものが、教科書の中に出てくるというのは、あまりふさわしくないと思います。特に低学年の場合、まだいろいろなことを考える前にこういうものが出てくるのはよくない。

それから、野口英世の話が出てきます。この人は手の手術が成功して、立派なお医者さんになったと書いてあるのですが、それは間違いです。京都大学医学部の学部長をして、京都大学総長をした平澤興さんという方が、杉田玄白以来の日本の医科について、非常に立派な本を書いていたと思います。その中に野口英世は当然出てきます。

野口英世は、手が動かなかったわけですが「手ん坊」と言われました。手術をしたが、手術は成功しなかった。だから野口英世は、自分と同じような苦しみを持っている人たちをできるだけ救えるように、外科医になりたいと思っていた。けれども、手が動かないということになると、外科医どころか一般のお医者さんにもなることは難しいということで、研究員になったということなのです。手術は成功したと言っている人は、野口英世の手の指を1本1本切り離したので、それを成功したと言っているかもしれません。しかし、切り離したけれど、指は全然動かなかったのです。だから平澤さんは、それは成功はしていないと言っているわけですし、私もやはりそれは成功していないほうに入るだろうと思うわけです。形の上で指は1本1本、5本の指になったかもしれないけれど、それが使えない、動かないということは成功していないと私は思います。

そして、野口英世が一生懸命、とにかくみんなのためになりたいと思ったのだけれど、お医者さんとして患者に接することができないから、研究員になったというのは、これもまたそれなりに感激的な話なのです。それを、野口英世は成功して立派なお医者さんになりましたという話を書いてしまったのでは、子どもたちに何の感激も与えない。だから失敗したことが、むしろ世界の野口英世にしたと言っていたことを書いたほうがいい。日本の教科書は非常に短いものですから、全部を書かないので、こういう薄っぺらいものになってくると思います。

それ以外にも、唐突にいろいろなものが出てきて、どうしてこれが出てきたかというのが分からないものがあります。例えば「耳」という漢字がやたらに出てくる。耳という漢字の書き方や説明ばかりたくさん出てきて、口や足や手の説明は出てこない。どうして耳ばかりやるのかとか、いろいろなことがあります。そういうこともあり、どうしても東京書籍でなくてはいけないということはないのではないかと私は思います。

大阪書籍も全体としてはよく出来ていますが、同じ人が3回も4回も1つの教科書に出てくるというのはよくないと思います。

3番目の学校図書については、ほかの所にもいろいろありますが、亡くなられた高木仁三郎さんという、原子力発電所に非常に反対した人がいます。高木さんは、昔そういう所の職員でしたし、研究者としてもいろいろな業績を残しています。しかし、この人の説だけを教科書の中で取り上げるのは問題があると私は思います。教科書は、基本的には確立した、どこからも異論の出ないようなことを載せる。または、いくつかの説があるならば、それを同じような形で載せていくというのがいいと思います。

例えば、原子力発電所というものがいいか悪いかは、いろいろな方の考え方があるでしょう。しかし、現実には日本では3分の1ぐらいを占めておりまして、これを無くすとすれば、水力はほとんど増やせませんから、石油の火力発電をもっと増やさなければならない。そうすると、これは地球温暖化にまた関わってきます。すでに石油の輸入量では、中国が日本をしのいでおりまして、中東の石油をどこが買い取るかということでは、価格争いになり、非常な問題を起こすことにもなりかねません。そういういろいろなことはらんでおりますので、高木仁三郎さんの説を入れるのならば、そうではなくて、やはり原子力に依存せざるを得ないということも入れなければ、子どもたちが原子力はいけないのだと初めから思ってしまうことには、問題があるだろうという気がします。

どの本も読みたい本、みんなが読みなさいという本のリストをたくさん挙げているのですが、やたらに挙げてどれがいいかもわからないし、私が聞いたことのない本もその中にたくさん挙がっております。そんなことをするよりは、精選された、子どものうちに読んでおくべきだという本のリストを整理したほうがいいと思います。そういう意味で、教育出版は非常に整理されたもので、しかも、簡単な批評といえますか、要約のようなものが付いていてよかったと思います。

最後の光村図書、これはいま使っている教科書ですが、私どもが前に採択したわけで、よく出来ていると思います。しかし、それでも唐突に、突然嘴だけが出てくる。嘴の説明があって、嘴の大きな絵が出てきて、嘴のことがたくさん書いてある。何でそこに嘴が出てこなければならないかということの説明もないし、私は、見て分かりませんでした。

そういうところでは、光村図書も同じような問題をはらんでいる。検定教科書ですから、全部の教科書が最低限のところは保証されていると思いますが、もっと問題を無くして、そして、その上の特殊性のところ、こういうところに特徴があります、いいです、ということで争っていただいて、私どもが、その中からいちばんいいものを選ぶ、そういうことにならなければならないだろうと思います。

光村図書のいちばんよかったところは挿し絵です。どの教科書も、子どもにおもねるように、たくさん絵が入っているのです。もう絵本です。だけど、文字であると情報量が少ないですから、

そこで頭を働かせて、いろいろ想像しなければならないものが、すぐに答が出てくるということになる。この絵の過剰は、子どもに対するサービス過剰ではないか。もう少し慎んで、控えめに、どうしても必要な絵でなければ、子どもに訴えないし、わからないものを絞って、きちんと挿し絵を入れていただくことにしてくださるといいのではないか。この5冊の教科書を読んで私はそう思いました。検定教科書ですから、最低限のところは保証されておりますので、絶対にこれが駄目だというものはないと思いますが、そういう印象を持ちました。

宮坂委員 私も国語という教科は、ほかの教科に先駆けて、最も大切なものと考えております。つまり言語、言葉というのは情報を伝達するための手段だけではなく、あらゆる面での論理的思考、知的活動の基礎を培うもの、育てるものであり、さらには、私たちが古来祖先から伝えられてきた日本人としての情緒、感性を培うものと考えております。それだけにいちばん大事なものですので、その観点で一応考えてみたのです。

まず、古典と現代文をバランスよく入れてもらいたいということです。日本語のリズムの美しさを肌で感ずる、音読に耐える文章を載せてもらいたいというのが1つの希望です。これは先ほど大藏委員もちょっと言っていました、あまり翻訳調の多いものはどうかという感じがしますが、これもバランスです。それが全くいけないとは言いません。

2つ目も大藏委員と重なる面もありますが、やはり国語の教科書ですから、戦争中の暗い話をあまり繰り返し述べるのはどんなものか。平和への思考、あるいは戦争の告発という気持はわかりますが、それもほどほどにしてもらいたいというのが私の考えです。

以上をベースにして、ひと通り拝見させてもらいました。1つ1つ簡単に申し上げます。最初に東京書籍ですが、これは感動的な教材も多く、バランスもとれて、教科書としては非常によく出来ている、いい教科書だと思います。また古典的な面でも、夏目漱石、芥川龍之介等、ほかの教科書に比べると比較的よく載せています。

日本語の調べという分野では、『平家物語』『枕草子』などが見られており、調査委員会の報告もおおむね好評でした。教科書としては立派だと思います。

ただ、私がちょっと気になるのは、6年生の上巻に、今西祐行さんが書かれた『ヒロシマのうた』という文章があります。今西さんは教科書によく書かれているのですが、全部で20ページ、手引きを入れると22ページです。この本自体が140ページほどしかないのですが、そのうちの22ページというのは相当の分量になります。悲惨な原爆の状況を、ここまで繰り返し述べる必要があるのかなど。もう少しほかの文章もあるのではないかと、この辺がちょっと引っかかります。

次に大阪書籍です。これも比格的好評です。調査委員会からの報告では、わりあい良い教科書になっており、ページ数も多くなく、無理のない内容になっているそうです。ページ数が多くな

い、分量が少ないということが果たしていいかどうか、これはいろいろと議論はあると思いますが、比較的よくまとまっていると思います。

また、面白いと思いましたが昔の仮名遣い。例えば扇を「あふぎ」、狼を「おほかみ」、文語調の使い方などの説明もあり、良い所もあります。しかし、全体的には古典がもう少し欲しいと思います。また、全体的にちょっと物足りない感じもします。東京の杉並区で使うにはどうかというところもあり、一応教科書としては良い教科書だと思いますが、そういう感想も持ちました。

続いて学校図書。これは教材が豊富で充実しているという意見もございます。ただ、資料編では、調査委員会からのお話もありましたが、漢字の送り仮名がオレンジ色になっているので、色弱の人、目の弱い人にはちょっときついのではないかとということが気になります。

また1年生に「たぬきのじてんしゃ」というのがあります。かわいい、何ということもない物語ですが、この中には体の特徴を「からかう」というような表現があり「からかう」という言葉が1年生の段階でどうかと懸念する人もあります。

そのほかに私が気になったのは、戦争中の暗い話が多い。具体的には「父ちゃんの凧」「ロシアパン」「アジアを見つめる、アジアから考える」。こういったことが、ことさら強調されているように思っ、教科書としては推奨できないと私は考えております。

続いて教育出版。これも説明的な教材が多く、少し難しいという意見もありますが、教科書としては比較的よいものだと思います。漢字についても、いろいろな説明の中で、漢字の成り立ち、この漢字は象形文字とか指事文字とかという説明がある。あるいは仮名遣いもある。ちょっと変わっているのは、日本生まれの漢字。国字というのですか、向こうから来たものではなく、日本で作られた漢字が全部で1,500字ぐらいあるらしいのです。「働、峠、匂、搾、塀」などは国字だそうで、これの説明があって、なかなか興味があります。しかし、全体的には古典がもう少し欲しいと思っ、物足りない感じがいたします。

最後に光村図書。これは現用のものであり、発展的な教材が非常に多く、全体的にはバランスのよい構成で、評価もおおむね良好です。

言葉についても、言葉の成り立ちが出ています。それから「温故知新」「読書百遍意自ら通ず」、そういう古い言葉の説明などもよくあり、子どもの興味を引きつけるような書き方がしてあります。ただ、全体的にはもう少し古典も欲しいし、とりたてて欠点もないが、特徴も少ない。何か平板な感じがしないでもありません。

以上が、私が感じた一般的な考え方です。結論的に申し上げますと、やはり慣れている、いままで使いました光村図書は捨てがたい。もう一度使ってもいいものではないかと思っ、2番目は東京書籍、そのぐらいかなと私は感じております。

委員長 お二方の委員から、随分詳しいご意見がありました。他の方はいかがですか。

安本委員 前の採択のときもそうだったのですが、国語の教科書は、どれも大変楽しく読ませていただきました。ただ、どの教科書にも共通して言えることが、あまりにも子どもに興味を持たせようとしている、その意図はわかるのですけれども、あまりに漫画チックというか、子どもっぽい場面が多いと再度感じました。

少し前に、私が子どもころ使っていた教科書とか、もっと以前の教科書を見る機会がありました。そのとき「あっ、こんな難しい本で勉強していたんだ」とびっくりいたしました。同じ年齢で、同じ教科書。時代も違うと言えばそれまででしょうが、あまりにも違うので驚きました。7、8歳の子どもが、いまと何十年か前で違うとは思えませんので、こんな難しいこともできた、できるはずなんだなと感じました。

いま学校の先生とお話しますと、年齢的に少し幼稚であるというようなお話を伺うことが多いのです。教科書は日々接するものですから、特に国語は、読むということにおいては、大切な部分だと思しますので、もう少し大人っぽくというか、年齢相応に考えていただければと思います。すべての教科書がそうであるということに少し残念に思っております。

国語の教科書というのは、紀行文とかもありますが、説明文と文学作品、2つに分かれると思うのです。子どもにとって文学作品は心を育む。要するに感動を覚える。思ったことを表現する手立てにする。それから、その作者の作品を読んで、もっとこの先が読みたいとか、この人はほかにどんな作品を書いたのだろうかという、読書の糸口になればいいと思っております。

説明文は、子どもの興味や関心を引く内容が必要だと思えます。だらだらといろいろなことを説明していても仕方がないので、興味や関心を持てる内容であるといいと思っております。

そういう観点でいろいろと、全部楽しく読ませていただいたのですが、現行使っております光村図書は、実は前のときも期待して見ていたのですが、今回もなお、もっと期待して拝見したのです。しかし、以前よりもっと漫画チックな表現になったような気がいたします。ただ、説明文などで、子どもの興味や関心を引くように、ファクシミリやeメールやインターネットなどについて、国語的な観点から捉えた文章が出ていたことに私は好感を持ちました。全体的にバランスもよかったし、子どもが読むのには最適と感じました。

あとは、巻末に前年度の漢字の復習というのが載っているのですが、これが大変見やすく、自分はこんなに習ったんだということが、そこまで来るとわかるので、それは勉強するときの励みになるのではないかと思います。

東京書籍は、物語的なものもとても感動的なものが多かったという印象を受けております。学校図書は、国語だけでなく他の教科書も、わりあい分量を増やしているような感じがするので

すが、国語も少し増えたような感じがしました。教育出版は、これからこういうことを勉強するのだということが、簡潔に最初に書かれていますので、これは好感を持てると思いました。現行の光村図書ですが、国語の専門でもありますし、私としては、この5つの中ではいちばん好感を持って読ませていただきました。

教育長 ほかの委員がお話になっていることと重複しますので、時間の関係で簡単に言います。国語というのは、ほかの教科を支えている基本的な日本の言語である。日本語の正しい使い方を習得し、また、母国語を美しく読み又は書き下す訓練をする、そういう教科だと思えます。そういうことから言って、共通してイラスト、写真が邪魔しているということは強く感じました。

いま学校では、読み聞かせの活動をやっている所がたくさんあります。これは絵本や紙芝居ではなくて、子どもを集めてボランティアのお父さん、お母さんが本を読む。子どもたちはジッと聞いている。その言葉の中に、3年生は3年生なりに、6年生は6年生なりに、いろいろなことを感じ、考えている。それがもともと言葉というものだろうと思えます。

そういうことからしますと、先ほど3人の委員が言っておられたように、すべての教科書に共通して、本当に児童の精神年齢に合っているのだろうか。また、イラストや写真が、子どもの発育を本当に支えていけているのだろうか。むしろないほうがいいということを、とりわけ詩歌を含む文学作品では感じました。

ある教科書に小澤征爾さんのことが出てきますが、その教科書の中で書いてあることは、そのとおりだと思っています。小澤さんのように、音楽という抽象的な国際共通言語を取り扱っている方が、「日本に生きている君たちは、まず日本語を感じ、考え、理解するための言葉をきちんと自分のものにしてほしい。それと同時に、外国語を学ぶ大切さを切実に思う」、こういう文章があります。もともと日本語、言語の習得というのは、絵や写真の助けを借りずに、教える立場・学ぶ立場でそれぞれに感性を磨いていくということだろうと思えます。

反面、説明文は効果的に写真があったほうが良いと思います。イラストは、正確に表現できていけばいいのですが、必ずしもそうは言えません。そういったことを感じました。

それからもう一つ。大蔵委員からもご指摘がありました外国作品の取扱いです。1年生に共通して『大きなかぶ』というのが出てきます。1社だけ除いて、佐藤忠良先生の挿し絵で、内田さんの訳でした。これは、本当は絵を先に見せて、子どもたちに文章を考えさせるほうが、論理を学ぶということから言えば、良いのではないかと常々思っています。佐藤忠良先生のあの挿し絵というのは、それ1つが芸術作品であります。そういったことを子どもたちに感じさせるということであれば、もっと違った使い方がある。内田さんの訳と西郷さんの訳は、引っ張る順序がまるきり違う。例えば、低学年で転校して、違った教科書を使ったら、同じ『大きなかぶ』が出て

きて、文章が違うという指摘が考えられまして、ああいうものの取り扱いはなかなか厄介だと思います。日本にも優れた作者は、たくさんいらっしゃいますから、できるだけ低学年には、日本人の書いた優れた日本語を読ませるようにしていただければと思いました。

5社がそれぞれの編集方針に基づいて工夫しておられて、私は1つ1つを申し上げませんが、いまの光村図書のを引き続き使っていくということについては、特段支障がないと考えております。

大蔵委員 今のことに関連していいですか。外国の話がたくさん出てくるけれども、日本語をちゃんと学びなさい。それから外国語を勉強しなさいという小澤先生の話があるということでした。だから、日本語をちゃんと磨き、日本のことをちゃんと知り、それから外国へ行くのだと私は思っているのです。これは指導室長に伺いますが、学習指導要領の中に、外国のことをできるだけ紹介するということはあるのですか。多分あるのでしょうか。

指導室長 国語の中でということではございませんけれども、国際理解の観点から、そういう視野を培うというような内容はございます。

大蔵委員 それは非常にわかるのですが、外国の作品や外国のことを書いたものを取り入れればいいというものではないだろうと私は思います。いろいろ外国のことが出ていても、必然性がないのです。

もう1回東京書籍のことを言いますが、この中に「桃花片」という朝鮮の焼き物の話が出てきます。しかし、焼き物の話が、どうしても朝鮮でなくてはいけないということでもないし、朝鮮のことがとてもよく分かるかということ、そういうものでもないのです。それだったら、陶工柿右衛門、もちろん佐賀県辺りの陶器は、朝鮮からの影響が非常に大きいし、ひょっとすると豊臣秀吉の後から始まったのかもしれませんが、しかし、柿右衛門が赤い色を出すために非常に苦労して何回も何回も焼いたものがあって、やっと赤い色を出して、これが日本の焼き物として世界に広がっていくわけです。これは非常に感激的でもあり、焼き物のこともわかる。そういうことからすれば、桃花片という作品を取り入れるよりは、そういうものを取り入れたほうがずっといいのだと思うのです。だから、外国のものをいくつか並べておけば、外国理解促進のために役立つ、ということにはならないという気がします。

指導室長 国際性については、学習指導要領には「我が国の文化と伝統に対する理解と愛情を育てるのに役立つこと」という文言と、もう1つ「日本人としての自覚を持って国を愛し、国家社会の発展を願う態度を育てるのに役立つ」、こういう文言がございます。

宮坂委員 私も、基本的に国語は、いま指導室長の言われたとおりだと思います。「読み書き算盤」という言葉が昔からありましたが、読むことに耐える、音読に耐える日本語のリズムの美しさを

肌で感じられる文章を数多く載せてもらいたいというのが私の考えです。

それで、光村図書のものがいちばんかどうかは、いろいろ議論はありますが、やはりそういう観点で、あまり特定の思想をそこに含めるものは、如何なものかなと考えております。そういう面で、光村図書はおおかた反対ではありませんし、いい教科書だと思います。望むらくは古典は、古典というほどでもない、せめて森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、その程度は。それから、きちっとした昔の言葉遣いも教えないと、もう昭和初期ぐらいの言葉も分からなくなってしまうのではないかと思います。そのベースがあって、その上で初めて外国の文化なども理解できるのではないかと私は思っております。

委員長 時間の関係もありますので、国語については、この辺で終わりにさせていただきますが、私も各社共通での注文というようなこともあります。ただ、今日は採択教科書はどれかを決めなければいけないので、その点に絞りますと、各委員が言われたような、文学作品と説明文とのバランス、また、宮坂委員が言われていましたが、古典というものをどういうふうに取り入れているのかということも大事だと思うのです。幼少時からそういったものを勉強させたいと思っても、かなり高学年になってからしか出てこないようなところに、各社の特徴が見られるのかなと思います。その辺の工夫が今後必要でしょう。以前のもの、そういった点について、さらに改善を加えた、現在使われている光村図書、その出版社を推したいと思います。皆様方のご意見も光村図書ということですが、それでよろしゅうございますか。

(「異議なし」の声)

委員長 国語については光村図書ということで決めさせていただきます。次に書写に移ります。国語は、特に基幹科目ということで、時間を費やしていますが、35分かかっています。進行のほうから言わせていただいて恐縮ですが、時間の案分から見ても発言のほど、よろしく願いいたします。

宮坂委員 どの教科書も教材文字が整然されており、報告書も大体大差なく好評です。ただ国語と同じということになりますと、やはり光村図書ということになるのではないかと思います。

一部の意見では、光村図書は硬筆の文字は美しいが、低学年が書くには少し難しいのではないかと。また、学習内容の量が多めであるという報告もありますが、私は、あまり気にすることはないと思います。分量が多いという意見があちらこちらで出てきますが、これはあくまでも勉強するための本ですから、分量が多いということが必ずしも欠点にはならないと思います。

これは書写と関係ないのですが、子どもに迎合するような、あまり絵の多い、絵本のようなものも如何かなと私は思っております。いずれにしても書写については、どの教科書も捨てがたいのですが、国語と同じということであれば光村図書でよろしいのではないかと思います。

また、これは学習指導要領にもあるので当然のことですが、各社とも、書くときの基本的な姿勢、筆順、用具の扱い方などはきちっと説明されており、結構だと思えます。

大蔵委員 私は書写というのがよくわからないのですが、文部科学省の学習指導要領でちゃんとやってもらいたいと思うことがあるのです。手紙の書き方、ポスターの作り方、カードの作り方というのがたくさん出てきますが、これは書写の範囲なのか、国語の教科書の中でやるのか、私はよくわからないのです。書写というのは、漢字の語源のようなことにまで広がって、何かまとまりがないという印象を受けました。どれがいいかについては、特に意見はありません。

安本委員 学校図書のは、3年生の毛筆の導入の部分がとても丁寧で、初めてやるにあたってはすごく分かりやすいのではないかという印象を持ちました。

光村図書は、1年生のときから毛筆を意識して、硬筆をさせるという姿勢が見えていて、いいと思います。ただ、書き順を番号で振ってあったりとかいろいろあるのですが、それがちょっとわかりにくいかなという気はいたしました。しかし、国語の教科書が光村図書であれば、できれば同じ光村図書のほうがいいのではないかと考えております。

教育長 書写というのは点画・筆順、美しく書くのがいちばんいいのでしょうけれど、字は個性です。美しく書きたいですけど、私みたいに悪筆もいるし、なかなか難しい話です。光村図書はとにかく量的に文字が多いというのが功罪というか、私だったら反面、子どもにはどんどん字を書かせて、止めやはねや筆順、そういったことを体感させるというトレーニングが必要だと考えています。書写についても、現在の光村図書を引き続き使うということについて、それでいいかなと考えています。

委員長 現行が光村図書でして、光村図書の現行のものと平成17年度から使用のものとを比較しますと、いろいろ大幅に改訂が加えられていると見ました。良い方向で改善されているということです。したがって、国語との関係で連動性も必要でしょうし、私も光村図書とします。光村図書と決めてよろしいですか。

(「異議なし」の声)

委員長 書写は、光村図書ということで決めさせていただきます。

次に社会に移らせていただきます。ご意見をお願いします。

安本委員 社会という科目は、教科として、考えさせることができる内容になっているかという点。あとは調べて学ぶ教科であると思っておりますので、そういうことを導入の部分でうまく出しているかということ。それから、説明が全体的に読んで分かりやすいかということを見ながら読ませていただきました。

現在使われている東京書籍のものですが、歴史の部分は、とても充実した内容で好感が持てま

した。ただ1カ所、6年生の教科書で、大仏建立の所の後に、聖徳太子が出てくる場面があって、「これはどうしてでしょう」と思ったので、構成に疑問が残ったのです。

他の学び方コーナーの「調べて学ぶ」というところは、導入にはとてもいいと思いました。これは、つかむ、調べる、まとめる、伝え合うという内容で、ステップを追って話を持っていっているの、とてもいいと思います。

教育出版のものも、なかなかいいと思いました。難しい表現や用語には、囲みで注釈や説明が付いており、わかりやすい部分です。

また、見たいページがすぐに見られるような工夫がされておりました。例えば、気候とか土地のことを見たいと思うと、そこをパッと開けるといような工夫がされておりましたので、よかったですとっております。

大蔵委員 私は、社会の教科書に共通したことを1つ言いたいと思います。地図もそうですが、中国の地名について片仮名がたくさん出てきます。例えば旅順ならリュウシュンと書いてあったりするのです。日本と韓国の間では、お互いに読んでおりにやりましょうと。例えば、小泉は韓国でもコイズミと読みましょう。その代わりに、盧武鉉という大統領は、日本でもノムヒョンと読んでくださいというふうにして、お互いにできるだけ現地音を採用するということをやっています。日本も片仮名と平仮名という表音文字を持っていますし、向こうもハングルはほとんど表音文字ですからできるのです。しかし、中国との間では、それが中国側にはありませんので、中国は漢字のままで読む。だから小泉もコイズミという中国読みをする。東京ならトウキョウという中国読みをする。その代わりに中国のものも、例えば江沢民だとか、政治家、土地の名前でも、基本的には漢字のままで日本で読むことにしてあります。一部、北京、上海、天津だとか昔から現地音に近い音で読んでいるものもありますが、香港（ホンコン）は、中国の正規の音でもありませんし、広東の言葉でも香港（ホンコン）というのはあまり言わないようですから、英語から入ってきたもので使っている。重慶とか西安とか桂林ならば、明らかに中国語で読めないです。そういうものを片仮名書きする理由はあるのかなと。基本的には漢字のまま重慶と呼んで、参考までに中国の音を添えるというならばわかるけれども、片仮名を先に出してしまうような考え方はちょっと違うのではないかと思います。

もう1つは、皆さんがたぶん初めから考慮に入れてない大阪書籍は、徹底して西日本が中心なのです。だから、東京とは関係がないという印象がありますが、東京にいる杉並区の子どもたちはいろいろなところで東京のことを知る機会はあるし、国語でもわかるでしょうし、理科なんかでも近くが出ている。そういうことから考えると西日本のことを知る機会があまりないから、思い切って小学校の上学年では、西日本をやったらどうかという面白さがあるのではないかと。

書籍を採用しようと言っているのではありません。しかし、大阪書籍の出来そのものは、決してそんなに悪いものではない。ただ、西日本にあまりにも偏りすぎているために、東日本側では考慮しないというのが強くなっているという印象を持っているので、ここで申し上げておきたいと思います。

宮坂委員 社会科の教科書について、一通り拝見しました。まず感想というか、一応気が付いたところだけを申し上げますと、各社ともそれぞれによくまとまっているいい教科書だと思います。ただ、最初に読んだ感想を申し上げますと、各社とも3、4年生のいちばん最初のところで、消防署、警察、交番の仕事について、わかりやすくいろいろ説明されています。これはこれで結構ですが、あまり自衛隊の仕事については説明されていません。これはどういう理由かはよくわかりません。例外的というか日本文教出版では、海の安全を守る仕事として、自衛隊とは違いますが、海上保安庁の仕事に触れていた程度でした。

日本の歴史は6年生で載せています。1冊140~150ページもある中に、日本の古墳時代、弥生時代から現代まで、膨大な量をまとめるのですから、どの時代のどの事件をどの程度詳しく載せるのか載せないのか。人物にしても誰を載せるのか載せないのかは、各社ともいろいろと苦労をされたのではないかと思います。一通り読みまして、正直言うと多少気になるところはありますが、何が大事か大事でないかは個人差になりますが、例えば1つだけ挙げると「お前の不勉強だ」と言われればそれまでですが、「渋染一揆」というのが1ページぐらい説明されていましたが、もっと大事なものがあるのではないかという感じがしました。その程度にしておきます。

それから日本と繋がりの深い国として、各社とも韓国、中国、アメリカ。確かに繋がりが深い。もう1社は、会社によってブラジルであったり、オーストラリア、サウジアラビアであったりいろいろななっています。その理由は、いまひとつよくわかりません。近い国というのは必ずしも繋がりが深いのか、遠くてももっと深い国もあるのではないかという感じもするし、考え方の基礎もよくわかりません。

よく問題になっている領土問題については、日本文教出版の5年生で取り上げています。北方領土を取り上げていますが、ほかではちょっと気が付きませんでした。北朝鮮による拉致問題を取り上げているのは、東京書籍、大阪書籍、教育出版です。ほかはちょっと気が付きませんでした。

これは、すべての教科書、人の名前でもそうですが、漢字が書いてあってルビが見られます。これは非常にいいことだと思います。しかし、逆に漢字と仮名の混ぜ書きも結構見られます。この辺の統一が取れていないような気がします。例えば、消防署は最初の「消」だけが漢字で、あとは平仮名。活躍は「活」が漢字で、あとは平仮名。避難所は「所」だけが漢字で、あとは平仮

名。これはどんなものか全部ルビがあるのだからルビを付ければいいなと思うし、低学年であればかえって全部平仮名のほうがいいような気がします。私たちはよく漢字を見て、読めるけれども書けない漢字がずいぶん多いのですが、やはり目に入ってくることは非常に大事で、社会で取り上げるべき問題でないかもしれませんが、この辺を統一してもらいたい感じがします。

大阪書籍は、大蔵委員はいい教科書と言いました。私も内容的にはいい教科書であることは肯定しますが、あの本は版が大きいのです。ちょっと扱いにくいのではないかとということも心配したし、調査委員会からの報告では、杉並区ではちょっと扱いにくいのではないか。光村図書、日本文教出版も資料集みたいに並べてあるだけで、ちょっと使いにくいという評価がありまして、結論としてお前はどうかと言われると非常に困るのですが、やはり、現用で使い慣れているということから東京書籍。正直言うと歴史の使い方、歴史の描き方には些か気になるところがいくつかありますが、全体的に見れば、現用の東京書籍がいいのではないかと思います。以上です。

大蔵委員 北朝鮮の拉致が東京書籍、大阪書籍、教育出版に出ているというお話でしたが、逆にこの3つの教科書は、第二次大戦の末期に、ソ連が中立条約を破って、日本に入ったというのが書いていないのです。ほかの2つには、中立条約を破って、ソ連は日本に参戦しました、宣戦布告をしましたと書いてあります。だから、これは裏表になっています。

大阪書籍について、私は大阪書籍を採用しようということではありません。けれども非常にいい話としては、5人の庄屋が筑後川の水を引く。下流のほうが、灌漑用水が足りないので、運河を作って上流にある所から引こう。しかし、これは失敗すると上の水がなくなったり、下で水害が出たりするために、「お前たちは必ずやるか」ということで、代官所に申し出て「やります」と。「失敗をしたらお前たちは磔にするぞ」と言われ、「それでもやります。今農民たちは困っておりますから」と言って、5本の十字架が立っている。失敗したら磔にするという中で、この5庄屋がお金を出して、立派に筑後川を作った。徳川時代の上からの命令が強い時代に、非常によくやっているのです。こういう感激的な話は、大阪書籍しかないのです。だから、大阪書籍もいい本だなと思います。

委員長 1つを採択となるといかがですか。

大蔵委員 大阪書籍は、皆さんの意見からして無理だろうと思いますが、是非ほかの教科書会社にもそういうローカルな話。東京にもあると思います。玉川用水もすごい仕事をしています。そういうのを社会科の話の中でも、国語の話の中でも、入れていただけないかなと。幕府の当時の権力は、いまの日本の政治の権力と全く違うから、すぐに殺してしまうような中で命をかけて、しかも私財をはたいてやったような話は、社会科の中で教えてやりたいなと思います。

宮坂委員 おっしゃるとおりです。私も概ね賛成ですが、東京書籍に江戸時代の江戸の町は、非常

に清潔で整備されていると載っています。いままでは、昔の日本は遅れた国というイメージで、我々はなんとなくきましたが、よく見ればいろいろな面があったのではないかと。そういったことを言い出したら切りがないのですが、東京書籍にちょっと感心したのは、江戸時代の東京の町並が非常に清潔だった。同時代の外国に比べたら、わりあいきちんと整備されているということが載せてあって、昔を知るという意味では、もちろんいいことだけではなくて、悪いことを載せてもいいのですが、みんなに知られていないことを載せる。あまり「洪染一揆」よりは、もう少しもっと別なものがあるのではないかと感じもします。たしかに戦争中については、日ソ不可侵条約を破ったことは書いていない。ただし、拉致問題について書いてある。どちらを取るのだと言われると甚だ返答に困ってしまいますが、その辺はバランスだと思います。考え方の基礎は、大蔵委員とあまり変わらないのではないかと感じますが、ただ版が大きいし、調査委員会からの評価では、使いにくいという感じがありますので、私は東京書籍でいいのではないかと思います。

大蔵委員 大阪書籍には小柴先生も出てきます。

委員長 事例が関西が中心ですから、ベースになるのはちょっと違うと思います。

宮坂委員 委員長にお任せします。

教育長 社会科も、本当に各社よくいい教科書を作られていると思いますし、国語の説明文とも関連するのですが、写真とか図がかなり効果的にそれぞれの出版社が工夫をして、子どもたちの文章理解を助ける役割を果たしていると思いました。ただ、21世紀に生きて、21世紀という日本の社会、この杉並という地域社会、国際社会かもしれませんけれども、それを支える子どもたちのことを考えると、この100年というのは福祉、教育、環境が基礎的な素養として、早い時期にいい芽を育てていくことが、社会科という科目の使命だと思います。その点で、環境問題を積極的に扱うという姿勢は必要だろうと思います。その点、大阪書籍の環境問題でのページの割き方というのは、この5社の中でいちばん妥当だと思います。または東京書籍、教育出版も環境問題を取り上げて、今日的な、また21世紀の問題を考える問題提起をしていると思いました。

北朝鮮の話が出てきましたが、これから現代社会のあり方を子どもたちが考える上で、国際理解というのが寛容の精神でいい悪いということではなくて、外国の方々とどういう具合に接していくかを学ぶ。それは先ほどの指導室長の英語の話にもありましたが、子どもたちが生きる現代社会のあり方を学習することから見れば、北朝鮮との国交の話が全く取り上げられないのは、どうなのかなと疑問に思う次第です。内容的には、大きく言うとそういうことですが、それぞれ工夫している中で、東京書籍はいま使っている教科書ですが、その編集のスタイルが問題提起型の学習の流れで、これを考えると他の4社との比較の話ですが、それからいうとかなりきちんとし

ていると思っていて、この社会科についても、現在の東京書籍を引き続き使うということで、どうでしょうかということです。

委員長 わかりました。各社それぞれ特徴があって、長所や短所というものもいろいろとご指摘になられたわけですが、いま教育長が言われたように、特徴的には、私は環境問題に関しては、かなり東京書籍のほうが目立っているような気がして、よく書いてある。全体的なまとまりは、資料なども多くて、東京書籍がベターな方向で改訂されてきていると受け止めていて、東京書籍がいいのではないかと結論付けています。若干、インターネットとかホームページとかの扱い方が抜けているような点もあります。この辺は、実際の授業の中で補充していく形が必要になってくるかなとは、私見として言わせていただきます。社会については東京書籍に決めさせていただきます。

(「異議なし」の声)

次に、地図に移ります。ご意見をお願いします。

教育長 これは2社しかないのですが、どちらかというのはなかなか厄介な話ですが、共通して過不足なく作られていると思えました。外国の方から見ると、日本が、フジヤマ・ゲイシャ・ハラキリという妙なイメージを持たれる同じようなイラストが、2社とも気になりました。例えば、ある教科書はアルゼンチンで、タンゴを踊っているところがあったり、いろいろありましたが、農作物や主要生産物を表示するならばわかりますが、国際的なイメージを、幼少の子どもたちに固定化させてしまうことはどうかと思えました。これは、2社共通しているので、感想でしかありません。そういう意味では、それぞれが工夫していて、各地図に詳しい補助資料があって、中学校にいつからの地理の学習との連携を考えると、理解を助けるような統計資料は、できるだけ子どもたちにふんだんに見せたほうがいい。つまり背伸びをさせることを含めて、子どもたちが、その統計資料をじっと見ていて、この地域はどういう特色があって、こういう地域に何があつてと、こういうことを自分で考える、興味を伸ばしていくような地図のほうがいいだろうということを考えているし、そういうことからすると、2社比較の中でどちらかということになりますが、帝国書院のほうが、子どもたちには薦められると考えました。

宮坂委員 私も2社しかありませんので、地図といえば、帝国書院が老舗でもありますし、それだけに蓄積されたものがあると思えます。たしかに東京書籍もなかなか情報が精選されています。ただ、巻末の世界地図もきれいに工夫はされていますが、世界の国と国旗という並べ方は、個人差があるから一概には言えないのですが、私個人としては、帝国書院が大きくて見やすい印象を受けました。

東京書籍については、調査委員会の報告書で、地図情報以外のページがもう少しほしいという

要望がありました。これは何を意味するのかがよく理解しきれない面もありますが、私個人として申し上げれば、日本の旧地名の薩摩の国とか土佐、出雲、武蔵の国と現在の地名とが、どの辺に位置するかが一目でわかるものが1ページぐらいあれば、昔の時代小説を読んだり、社会や歴史の勉強をするときに参考になるのではないかと。そのぐらいのサービスはしてもいいのではないかと感じました。ただ、これは帝国書院もありませんので、これをもってどちらがいい悪いを言えないので、あくまで私の希望なのです。いまの段階では、帝国書院のほうが見慣れているせいもあるのかもしれないが、いいのではないかと思います。以上です。

大蔵委員 教科書の連動というがあるので、宮坂委員の話のような旧日本の国名みたいなものは、社会の中にあまり出てこないで、私はいらないのだろうと思います。そういうことからすると社会の教科書を東京書籍にするのなら、ちょうど国語と書写を一緒にしたように、地図も東京書籍のほうがいいということにはならないのですか。ただ、帝国書院は社会の教科書はありませんから、そこは難しいですが。

先ほどの教育長の話のどこまで資料を入れるかということですが、先生方の話を聞くと資料は必要に応じて、そういうものを買わせたり、コンピュータからダウンロードして、みんなに配ったりしているということです。この地図の中に、それをどれぐらい入れていかなければならないかは、なかなか難しいのではないですか。卒業してしまうと、ちゃんと教科書をお取りになっている方もありますが、大抵の人の教科書はどこかへ行ってしまうのです。けれども地図だけは便利だから、置いておくことが多いです。そうすると資料の部分はどんどん古くなっていくので、あまり付いていなくてもいいのではないかと。だから帝国書院をやめて東京書籍にするのがいいということではありませんが、あまり決定的なことではないのではないかと気がします。

教育長 ただ、地図というのは、社会科の本当にごく一部で、それをどういう具合に理解を助けていくかという、元々地図は補助資料というイメージを持っていて、杉並区に住んでいて、例えば、山梨県のことを学ぶにしても、これが少し風土の違った異文化の理解になります。外国になると、国際理解を子どもたちにどう助けていくか。まだ小学校高学年の課程にある子どもたちは、結局何もわからないという前提で、何を自分で考えさせれば、どういう国際理解の根を育てていくかを、じっくり助けていこうという立場に立って、編集しているかどうかは1つのポイントだと思います。だから国語と書写の関係と違って、社会と地図の関係というのは、そう深く考える必要はないと思っています。正確に地図の成り立ちというか、縮尺のことですとか、作図作法のことという基礎的な知識が学べる。これは、東京書籍も帝国書院も確立された方針としてありますから、それは遜色がないことですが、あえて申し上げれば、統計資料は中学生になっていく子どもたちを考えると、先ほどの国語のイラストではありませんが、あまり子どもたちの学年に合った

ものだけではなくて、少し背伸びできるような、難しい統計資料もふんだんに見せてあげる。しかも、お金を出して買えばいいのではないかということもあるかもしれませんが、買わなくてもそこで準備されていて、教員も新たにインターネットから引き出して用意することもなくて、地図を見ていれば、指導ができるという条件で、より整ったものを採択してあげたほうがいいのかと。比較の話ですから、そう考えています。

大蔵委員 子どもが暇なときに、暇だから国語の教科書を読んでみようというのは、あまりないと思います。地図はあります。だから、地図だけを見て楽しいとか覚えられたとか、何かの事件が起こったり、有名な俳優が来たり、韓国から来たりしたときに、韓国はどうなっているのかを見てみよう、教科以外のところで独立して見るがありますから、そういう点での楽しさとかわかりやすさがいちばん大事なのでしょうね。

教育長 イメージが膨らみます。10年前の地球儀ですから全然役に立ちませんが、私はよく地球儀を見て、行ったことのない外国でも本当にイメージが膨らみます。地図というものは、そういうものだろうと思います。そういうことからすると、数字で見るか、図面で見ると、いろいろと子どもたちの関心、興味を膨らませていくことからして、相対評価の問題にしか過ぎませんが、帝国書院のものがしっかりしている感じがします。

委員長 安本委員、一言どうぞ。

安本委員 小さいころから地図は帝国書院でしたので、東京書籍が地図を出していることに前の採択のときに「ああ、あるんだ」と思いまして、ちょっと新しい驚きだったです。地図は結構楽しめるし、そういうことからいうと、あの形だけからイメージを膨らませること、いかに頭で想像することが大事かがよくわかります。帝国書院でいいと思います。

委員長 一通りご意見をお聞きしました。私も地図で育ったので、地図が大好きで、皆様方が言われていることはよくわかります。杉並区で使われる場合に、東京中心の大きな図があるべきということは誰も思いますが、それが帝国書院だと扱えるということも選択肢の1つかと思います。その他いろいろありますが、帝国書院に決めていいですか。

(「異議なし」の声)

委員長 地図に関しては、帝国書院に決めます。

次に算数に移ります。ご意見をお願いします。

大蔵委員 いちばん変わったといえば、教科の中では算数の教科書ではないかという印象を受けます。前回、円周率3.14がないとか、いろいろなことをたくさん言われました。その反省でいろいろと変わったのだと思いますが、発展的な内容が非常に多くなって、わりあいに難しい、伸びていく子はたくさん覚えられるというようになっています。けれども、そのために逆に安直に発展

的印がたくさんありますが、その発展的な内容という印をやたらに付けていると、先生も子どもたちもどれがどれだか「これも発展なの、これも発展なの」となる。先生のほうでは「これは発展的な内容だから、逆に平均的な子どもには教えなくてもいい」ということの紛らわしさみたいなものが出てきたような気がします。私がいちばん言いたいのは、これも学習指導要領に書いてあるかどうかをよく知らないのですが、どの教科書にも、1年生のいちばん最初に1から10までに振り仮名があるのです。いくつかの教科書は9のところに「キュウ」と書いてあります。これは全く馬鹿馬鹿しいことではないかと思えます。幼稚園に行かなくても、保育所に行かなくても、1から10までの数字を読めない子どもはないだろう。特に9について「キュウ」と書くとしたら、4は「ヨン」と読む、7は「ナナ」と読むことがなくなってしまうのは非常におかしいことではないか。昔は4というのは、四十八手とか、四十七土とか、一般的に全部「シ」と読んだのです。ところが、いまはどちらかというとなんか1、2、3、4と番号のときに言います。「40の厄年」とか言いますが、「シジュウ」と言う子どもたちはいないと思う。「ヨンジュウ」と言うだろう。「シチ」も、どちらかというとなんか「シチ」と「イチ」を間違えることがあって、「ナナ」を誘導したということがありまして、いまは700(ナナヒャク)と言うだろう。私は、そういういろいろなことがあるのだったら、この振り仮名の1から10がなければ、子どもたちはそれぞれに読み方を自分で考えて読んでいこう。書かれてしまうと「ヨンというのは違うの、いけないの」と思わせるような余計な話だと思う。もしも、学習指導要領でそんなことを指導しているのならば、こんなことはやめたほうがいい。それをまたみんなが習って、学習指導要領どおりにやっていない教科書もいろいろなところにあります。学習指導要領にはあるけれども、使わなかったというのもあります。それは、教科書検定で非常に不利な扱いをする恐れがあることは事実でしょう。でも、それでもパスしているのもある。そういうことからすると、これをなくす勇気のある教科書が1つぐらいあってもいいのではないかと思えますが、全くありませんでした。だからそれは非常に残念です。

それから、一つひとつの教科書を見て細かくは言えませんが、桁の区切り方として、日本は4桁で区切り、外国は3桁で区切ります。だから1,000、1,000,000、1,000,000,000と区切っていますが、日本は万、億、兆ときます。これを教科書の中で、千万や千兆で区切っているのは何の意味もないです。4桁区切りでも3桁区切りでもない。だから、変な言葉はやめたほうがいい。できるだけ、子どもにわかりやすい数字の区切り方をしたほうがいいと思います。

一部の教科書は、やたらに見開きがあります。この見開きというのは、それなりの必然性がなくてはいけないのに、何の特徴もなく、やたらに見開きを作って、子どもに特別の印象を与えようというか、そういうのはかえって煩わしい。そういうのは整理して、必然性があるものだけに

絞っていったほうが良いと思います。そういうことを感じました。しかし、検定が厳しいのでしょう。全体としては、最低水準のところまで全部一致していますから、どうしてもこれではいけないとか、これは絶対駄目だというものはあまり感じませんでした。

宮坂委員 いま現用は啓林館ですが、啓林館を採用した3年前の経緯を考えますと、算数というのは習熟度に応じた学習が必要ではないか。そうすると分量が多くて、少し問題量も多いけれども、あえてチャレンジさせるという気概で啓林館という話があったと思います。また、子どもの能力を引き出すのはもちろん教科書だけではなく、先生の努力なのですが、子どもたちの能力も段階的にいろいろなところで見られるように底を引き上げてくれることで考えると、啓林館は使い方によっては、下のレベルの子どもにとっても、努力の対象になるのではないかという意見の中で、啓林館に決まったと考えています。今回、教科書調査委員会からは、やや啓林館にとっては、批判的な見解も見られていますが、逆に学校からの細かい報告書には、内容面では、発展的にまたは実用的に編纂されているといった考えや振り返りのページがある。児童一人ひとりの学習を進めるのに役立つといった意見があり、現在使われているものより、もっとわかりやすくなっている。だから、段階を踏みながら、学習することができる工夫もされているという意見もあって、このようなことから、報告書の中身は欠点ではなく、長所ではないかと考えています。

啓林館の大きな特徴というものは、単元ごとに補充と発展が置かれているということで、どの単元でも、例えば一斉授業を行う、少人数指導を行うということが選択できるように工夫されている。これが全部まとめて最後だけに載っているのではなく、単元ごとになっているのが1つの特徴ではないかと思います。教育改革アクションプランでも少人数指導や習熟度別の学習グループの編成などを打ち出していますが、これらのことからいくと、かえって啓林館は使いやすいのではないかと感じています。さらにもう1つ付け加えると、今「確かめ」「補充」「発展」「感想」が単元ごとにまとめられているのは、子どもたちの理解度の確認、その段階ごとに評価するために次の指導にも先生もやりやすいのではないかと思います。

最近、電卓、算盤については大体載せています。特に算盤は、学校でやる必要はないという意見が一部にあるようですが、現状では算盤はある程度きちんと知識を与える必要があると思います。大体どこも3年の下巻のほうで扱っているようですが、内容的にはもちろんばらつきがありまして、算盤に関するページ数が多いければ、重視していることにはもちろんなりませんが、内容にもよりますが、1つの目安として申し上げると、パラパラと見た段階で、教育出版と啓林館は4ページを当てています。大日本図書が3ページ、学校図書、東京書籍は2ページ。特に学校図書は漫画風になっていて、扱いを軽くしていて、必要はないのではないかという雰囲気になっており、ちょっとどうかなと感じました。現在啓林館を使っていて、私はあまりこれを変える必

要もないのではないかという考えを持っています。以上です。

教育長 この算数も、いま大蔵委員が言われたように、学習指導要領が変わって見直されて、いちばん変わったところは、学習指導要領にない項目がいちばん増えた科目です。本当に増えています。補充学習でいうと東京書籍がちょっと控えめであることを除けば、ほかの出版社は遊びに使うのも含めて、補充授業が本当に充実してきているように思いました。数というもの、あるいは図形の基礎的知識、解法を子どもたちがどう意欲的に学ぶことができるかを、それぞれの会社が編集方針を立てて工夫しておられることを感じました。東京書籍は既習事項を活用して、多様な複数の考え方ができるように工夫していて、数学的な見方、考え方が身につくような指導ができる教科書に読めましたし、それぞれ上巻の学習感想で学んだことや気付いたこと、友達と話し合ったことをノートに取るように指導しています。これは振り返るときに何を学んだかという記録が残って、大変いいと思いました。

大阪書籍も同様に複数の多様な考えを載せたり、記号を使ってわかりやすく説明していると感じました。練習問題が大変豊富で、基礎・基本の定着にかなり苦心をされていると思いました。大日本図書は、構成がどちらかという問題解決型であるように思いました。大日本図書も上巻で「ノートにまとめよう」という項を設けていて、学んだことを記録する習慣付けを指導しようという姿勢が伺えました。学校図書も復習の子どもの考え方がはっきり示されていて、発展的なものを最も多く取り扱っており、6社中、問題数が800問を超える大変多くの問題を提示している特色があると感じました。教育出版は系統的によく整理されていると思いましたが、基礎・基本は確実に押さえています。この6社の中では、問題数がちょっと少ないように感じました。

啓林館は、複数の考え方を引き出す工夫をされているし、各単元の内容も発展的学習も含めてかなり充実をしていると思いました。この啓林館も上巻の中で「学習の感想」という項目を起こして、学んだことを記録をする習慣付け指導を行うところがあって、東京書籍、大日本図書、啓林館の3社は、子どもたちに学んだことを整理させることによって、この何時間かで学んできた単元について、後になってきちんと記録を取って、例えば、分数の足し算、引き算から分数の割り算、掛け算になりますが、足し算、引き算のときに何を学んだか。足し算、引き算と掛け算ができなければできませんので、そういったことがきちんと整理できて、子どもの理解を助けるなど、この3社に共通して思いましたし、また複数の解法を提示している教科書も多く見られました。本当にそれぞれの会社で工夫しておられると思いました。

先ほど大蔵委員のご指摘で、見開きの多いものがあるということで、確かに何社かあります。なぜかと思ひまして、ある会社の6年生は、展開図と見取図が左と右で見開き状態になっていますが、ある出版社は、その前のところで奇数と偶数のページの繰り合わせで、どうしても折り込

みにしないと一覧できない。つまり見取図と展開図が奇数ページと偶数ページになってしまうと一覧できないということがあって、そういう編集の都合上、便宜上そういうことになったのではなかろうかと思いつつ、大蔵委員の話を聞きました。私はそういうことなのかと理解していて、あまり指導や学習の障害にはならないと思います。

この6社の中で、3年前に啓林館が採択されたわけですが、3年サイクルですから、教科書を変えても何ら差し支えないといえば差し支えないのですが、一度採択されたものをほかの会社と比べ際立っておかしい、比較の問題でこれはどうにもならないということであれば別ですが、やはり安易にというか、ほかの会社と遜色のないという評価の中で、あえて変える必要はないと思っています。また、杉並区では、今年度から、区独自に学力の調査を始めようと考えているので、そういったことの効果検証のベースの難しさからいっても、啓林館の教科書を引き続き使ったほうがいいのではないかと考えています。

安本委員 算数は子どもにとって、いろいろとつまづくポイントがいくつかあると思いますが、例えば、最初のころだと繰り上がりとか繰り下がり、掛け算は覚えていくのですが割り算は掛け算と関係があって、そのときにつまづき始める。それから、どんどん進んでいくと分数と小数。これは同じ考え方かどうか問題になってくると思いますが、そのあとに小数の掛け算、割り算が出てきて、混乱するポイントというのは多分こういうところだと思います。計算とか九九にしてもそうですが、覚えればよい部分と反復練習すればよい部分があると思いますが、算数はそれだけではなくて興味や関心を持って、なぜどうしてこうなったかがわかるのが教科書だと思います。私も全部見させていただいて、啓林館は本当に問題数もやや多いし、大変難しい内容であるのはわかるような気がしました。ただ、いろいろな工夫がすごくされていて、絶対これはというポイントはなかったのですが、難しいことやいろいろな単元の配列がほかと違うような感じがしたこと、意味というものをあまり考えさせていないのではないかという印象を受けました。

東京書籍は、3年生ぐらいからだったと思いますが「面白問題」というのがありまして、小数の魔法陣とか時間の計算を筆算でしようという、わりあい普通の教科書には入らないような分野があるのですが、これがなかなか面白い。ただ、後ろに答が付いているので「ああ、わかんない」でパッと見てしまうところはあるかもしれないけれども、なぜどうしてということを考える手立てにはきつとなるのではないか。これは、とても特徴的だと思います。どの教科書も発展的な部分をなんとか効率よく盛り込もうとした努力というか、それはよくわかります。杉並区だけではなくて、ほかの区でも習熟度別の学習はどこでもやっていますが、それになんとか対応できるような教科書にしようという意図は、どの教科書からもよくわかりました。

ただ、東京書籍は使いやすそうだなと思ったのは、問題があって答というのが同じページに出

ていないのです。ですから、教科書を使って勉強しているときに、答はというときに、ページをめくらないと出てこないというところは使いやすいというか、安直に答えを出さなくて、見なくて済むだろうという印象は持ちました。

あとは、学校図書が割合すっきりとしていて、見やすかったことが印象に残っています。

大蔵委員 委員長がまとめる前に一言。1つは教育長の話ですが、一遍採用したものが決定的に悪いとか、他のがよくなったというのがなければ、継続してもいいのではないか。しかし、私は決定的ではなくても、いいものがあれば、そちらに乗り換えてもいいと思っているのです。

例えば、啓林館を前に採用、採択した時には、練習問題などが多い。それから、他のものよりもその時は厚かったです。だから量が多いのは、できるだけたくさん子どもに勉強させて、頑張ったほうがいいのではないか。

しかし、現場の先生たちの話では、いま学校の算数の時間も減っているので、厚い教科書だと使い残すことがある。教えない場所があったりすると、先生が保護者からも教科書を全部教えなかったと、いろいろ言われる恐れもある。

それから、これがよくわからないのですが、教えにくい、使いにくいというのが1つ。これは、あまり説得力がありません。この部分がいいとか悪いとかいうのは、いいか悪いかを見ていって、そう書いてあるからこれはいいな、ほかにはないなとかわかるのですが、教えにくいか教えやすいかと言われると、私どものような教育委員には、なかなか判断しにくいです。なぜ教えにくいをもっと細かく書いてあればいいのですが、それはあまりない。直接的な印象としてはそういうことです。

それで、とにかくドリルも多いので、啓林館でいいのではないかとやったのですが、それからいろいろ聞きますと、やはり練習問題なんかは、別にプリントをしたり、練習問題帳を買わせたりして、やっているというのです。そうだとすると教科書の中にそんなにたくさん、大して違わないのですが、ほかの教科書よりやや多いとか少ないとかいうのは、あまり決定的な要素にはならないのではないか。

もう1つは学力調査です。これはいま、学力調査を例年やっていくのにあまり教科書がしょっちゅう変わると、その先生の教え方についても、子どもの学力についてもわかりにくいということが出てくる。それはその通りです。

去年、東京都が、小学校の場合は4年生を調査しまして、杉並区はなかなかいい成績だったのです。それからしても啓林館の教科書は、そんなに悪くないということが言えるかもしれませんが、私は、毎年、定点観測をするのには賛成で、必要なことだと思います。しかし、それが本当に学校で教えている力かどうかについて、私はやや疑いを持っています。やはり塾の力というの

が非常にあるのではないか。

日本の子どもたちが外国に行くと、みんな日本の子どもはマスマティカル・ジニアスだ、数学の天才だと言われるのです。それは、やはりいろいろな計算問題などをやっている。しかし、その計算問題は、実は練習問題であったり、塾の力であったりすると、なかなか学校が教科書でどこまでやっているかはわからない。

東京都の調査でよかったけれど、もう1つ、杉並区の子どもがどの程度塾に行っているかということ。ほかの区と比較をすると、面白いのではないかと思います。杉並区はわりあい豊かな区ですから、積極的に塾に行っている子どもは多いのではないかと思います。そういうことからしますと、定点観測についても、何年かに1回教科書が変わっても、それほど致命的ではないのではないか。ただ、啓林館がどうしてもそれで悪いというほどのものではありません。それは考えなくて、いまこの教科書がいいかどうかということをやったほうがいいのではないかと印象として思います。

教育長 今回の学力調査の中では、家庭での学習の実情なども調査することになっておりますので、そこでわかってくると思いますが、私は、義務教育課程にある子どもたちというのは、家庭に余計な負担をかけなくても、支出をしなくても、教科書で教師が教え、それを予習、復習することを通して、子どもがその素材だけでいろいろな学びができる、というのがいちばん望ましいと考えています。そういう意味ではたしかに、教えられる素材とドリルとは切り離して、ドリルは教師がつくれればいいじゃないか、買えばいいじゃないかという話になるかもしれませんが、やはり基礎的な問題は、ふんだんにあったほうがいい。いちばん多いのは、先ほどお話しましたように、学校図書が800問を超えていて、1年生から6年生まで通していちばん多いのです。その次に多いのが啓林館だと思っております。

1年生から6年生までを通しての傾向でしか言えませんが、いろいろなことを指導し、それを指導の中で解かせ、自宅で宿題か、自分で復習するかはともかくとして、教科書の中で学べれば、それはいちばんいいと感じておりますので、そういう中で教科書を使って、ある時期に達成度の調査をやる。成果が出てくるかどうかは自信はありませんが、ただ予習、復習の時間とか、塾通いの生活実態等を複合的に組み立てていけば、杉並区教育委員会として学校教育の中で、どういう素材を使って、どういう指導をしていくのがいちばんいいかが、実態として見えてくると思うのです。そういったことからしても、去年か一昨年のも東京都の4年生の調査がありますが、次のことはわかりません。これは啓林館のテキストを使い始めてからのテストなので、東京都で実施されるもの、また、杉並区独自で実施するものを含めて、教科書を巡る指導と学習と、その到達度の効果の検証を、ある程度客観的にやってみる必要があるのではなかろうかと、教育長の

立場で感じているところです。

宮坂委員 私も、ほかの分野でもよく議論になるのですが、分量が多い、難しいということは、これは教科書で、絵本や何かではないのですから、決して欠点にはならないと思います。啓林館もたしかに難しいし、分量が多いので、全部やりきれない。ほかのやさしい教科書を使っても別の問題集がある、あるいは塾でやる、だから子どもたちの成績は、結構杉並区でもいいのだろう。これはやはり、本来、塾に頼る、ほかの参考書に頼っていけないことはないのですが、それに期待をかけるのはやはり話が違う。本来は教科書がきちっとしていれば、教科書だけきちりやれば、難しいというのは決してマイナスにならないと思います。

啓林館は、下のレベルも教えるようにいろいろな段階的にできるという面で、何で使いにくいのかなと思うのです。私は実際に教壇に立った経験はないからわかりませんが、ちょっとその辺が理解できないです。そういう意味で、やはり今まで使ったものをもう1回使いこなすことは、必要ではないかと思います。

よく先生は、「教科書で教える」のか、「教科書を教える」のかが議論になりますが、優秀な先生はどんな教科書を与えてもきちっとした教育ができますが、逆に駄目な先生は、立派な教科書を与えても駄目なのです。「教科書を教える」ではなくて、「教科書で教える」というのも1つの理想なのですが、大多数の先生は、やはり教科書を教える、教科書に頼るになるのではないかと思います。それで付随的に、余力のある人は塾に行ったり、別の参考書を使ってやっているのではないかと思います。やはり基礎となる教科書はある程度のものを、きちっと与えておく必要はあると思いますし、先生方には勉強してもらいたいと思います。ほかの教科書は駄目だとは申しませんが、それぞれにいろいろ特徴がありますが、せっかく一度やってこられて、成績も悪くなかったのですから、あえて固執はしませんが、そういう意味でもう1回使ってもいいのではないかと、というのが私の考えです。

委員長 前回も算数については、ずいぶん苦労したと思うのですが、今回も東京書籍、大日本図書、啓林館といった感じですが、教える側、学ぶ側、当然継続性ということが、教える側は余計あるわけですから、そういったことも加味して、啓林館ということにさせていただきたいと思いますが、いかがですか。

安本委員 調査委員会から上がってきた報告書など、私も算数の教員ではないしそれはわからないけれども、どうして教えづらいとなっているかを調べたほうがいいと思うのです。やはり教わっているのは子どもですから。その部分がすごく私も曖昧で、どうしてこんなふうになっているのかはちょっと疑問なのですが、変えることに関しては、3年に1回はそういうふうに変え直しましょうという機会があるのですから、それはいいと思うのです。

大蔵委員 教科書を変えると、継続性の問題が先ほど教育長から出ました。今変えると、1年生から6年生までいるわけですが、来年度変わるわけですから、いまの6年生は関係がないです。1年生も今度新しく入って来るわけですから関係ないのですが、今の1年生は、来年から2年生で教科書の会社が変わると、別系統のものになる。その接続の部分があまりうまくいかない。これは2年生になっても3年生になっても同じです。現行の5年生までは教科書を変えれば、その煽りを食うわけです。

そうかといって、それをあまり考えていたら、教科書を変える機会がずっとなくなってしまう。それなら、昔の教科書のように、国定教科書で10年変えないことにしてしまったほうが、話は簡単です。それからすると、今のように、一括してどこかの教科書に全部変えるのではなくて、例えば、算数だけでいえば啓林館を使っている。来年から急に変わると、いまの5年生が別の教科書会社のものを使うと、極端なことを言えば学習指導要領の中で、6年生の分を早く5年生に繰り上げて、発展的に入れている所もあるわけです。そうすると、それは習ってしまっている。外していると、習っていないのに、6年生で難しいことを習わなければならない。そういう矛盾が起きますから、今までやっていた部分だけ、例えば来年から変えるならば、その部分だけは、前の教科書を使っていく。しかし、新しい1年生には新しい教科書でやる、そういうことも、教科書採用上、本当はあってもいいのではないのでしょうか。いろいろな採用の仕方があって、部分的に取り入れるということがあってもいいのではないか。そうでないと、教科書をなかなか変えにくいです。

教育長 変えることがどうかでなくて、長いこと使ってもおかしくありませんが、これまで長いことほかの出版社のものを使っていたのですよね。それで、あえて3年前に違った出版社の啓林館が採択されて、使いにくいのは当たり前なのです。つまり、小学校の先生は、専科ではなく全科目を教えるという立場で、3年前と今の状態は、極端なことを言うと算数だけが変わった。

そうすると、全科の先生にとってみれば、ほかは多少、学習指導要領によって、構成が違ってきますから、検定でチェックの内容が違ってくれば、少し違うかもしれませんが、基調が同じなわけですから、それは余計な負担をかけなくとも、例えば、1時間なら1時間で準備ができると。教科書が変われば、新しい教科書をやるわけですから、その3倍ぐらいの負担がかかってしまう、それは当たり前の話だと思ふのです。

使いづらいうというレベルの問題だとすれば、それは本当に教える側での努力の範囲できちんとやるべきものです。

先ほど、単元の配列でほかと違うという話でしたが、それは各社違うと思ふのです。3年ぐらい前まで使っていた教科書をベースにすると、単元構成は違っていて、今まではこうやって教え

てきたのに、それが例えば、比例などはこう違っていて、教えるのが少しテクニックが必要だ、それは当り前の話だと思うのです。もともと3年前に変えるときに、当然そういう議論があったと思うのです。ですから、いまやってみて使いづらいという意見が出てきたからというのは、私は3年前ここにはいませんでしたが、それは当り前の折り込み済みの議論をされている筋合のものというように考えています。

調査委員会から報告いただきましたが、例えば問題数が多い、少ないといろいろ指摘がある中で、実際と違うという意識もあるのです。つまり印象、いちいち先生たちも現場で1問、2問、3問と全学年通して、カウントしていたことはないでしょうから、印象として多い、少ないという話だと思います。これは絶対数、カウントした記録、集計でいうと、例えば、前回も問題になった習熟度別において、発展的学習の取上げ方が、啓林館がいちばん多い。今回は東京書籍がいちばん多い、ダントツに多いわけです。ですから、それぞれに工夫をして、それぞれが学習指導要領の改定に応じて、編集方針を立てられて工夫した結果が、そういうことになったというだけの話ですから、変える変えないは自由ですが、1度変えたものをコロコロ変えてしまうと、また難しい、使いづらいという議論を蒸し返すだけの話で、1回決めたことはやはり私は、具体的に言うと2サイクルぐらいは使ってみたい。1度使ってみて、いろいろな意見が出てきて、本当にそれがそうかときちんと見極めた上で、もう1度採択の検討の中で、それを活かしていきたいと思っています。

3年前に議論できなくてとても残念ですが、今年についていうと、啓林館をあえて変える必要はないのではないかと思います。各教科書の中で東京書籍や大日本図書、啓林館が上巻の中で、学んだことをきちんと整理をする、そういう指導ができることは、大変それぞれの学年に大切なことだと感じています。また書いていない教科書も、そういう工夫を教員がすればいいことですから、別に何ということはないのですが、やはり半ページくらい割いて、子どもたちの学びの支えをしようという姿勢を示している東京書籍、大日本図書、啓林館には、算数の基礎的な学びを子どもたちが意欲的に進めていける姿勢が窺えましたし、他社と比べ、そんなに啓林館の教科書が見劣りするとか、何か高度なものを求めているということを感じないだけに、3年前の議論は、まだまだ整理するには少し早すぎるかなと思っているだけのことです。

委員長 よろしいですか。では、啓林館にさせていただきますが、よろしゅうございますか。

(「異議なし」の声)

委員長 では算数については、現行どおり啓林館といたします。

次に理科に移ります。

宮坂委員 理科は、現用は教育出版を使っています。教育出版は、環境教育の配慮もありまして、

全体的には資料が豊富で使いやすいという調査委員会の意見もありまして、私も一応、原則的にはこれでいいのではないかと考えております。

なお、ほかの教科書につきましては、よく植物、昆虫の素材が、杉並区の地域の実態に合わないのではないかと意見もありますし、あるいは3年生の内容が、たしか生物の教材のみになっているという批判が、いくつか見られます。そういったことを考えますと、やはり算数ではないのですが、コロコロと変えるのもなんですから、特に大きな問題、ここが駄目だという意見がなければ、私は現行の教育出版でよろしいのではないかと考えております。以上です。

教育長 いま、宮坂委員からご指摘があった3年生の1学期が生物教材だけになっているのが、東京書籍、大日本図書、啓林館だったと思います。これはちょうど4月から夏場にかけて、いちばん植物を育てる、観察に非常にいい時期だというのが、たぶん影響しているように思います。他社では日光の観察やいろいろなことがあります。ただ、そういう理由があるにせよ、やはり1学期に植物、生物のところだけというのは、ちょっと弱いという感じがあります。

それから、社会科と理科というのは、いちばん地域性が出る。算数や国語というのは、その地域で取り上げるのが玉川兄弟か、筑後兄弟か、それはいろいろあるでしょうが、簡単に地域性が出ないところだと思うのです。理科や社会は出るのです。杉並区の区立学校の小学生に学ばせるとなると、やはり東京近辺で目にするもの、手に入るものを前提に組み立てていくのがいいのかなと思います。

もう一つ、やはり理科という科目は、問題解決型であることがベストだと思っています。それぞれに工夫がある中で、比較検討でいうと教育出版か東京書籍。東京書籍の3年生の1学期は生物教材だけというのは、やや気になるところですが、発展的学習の項目が全学年を通じて、どの教科書もやっています。比較考慮の対象にならない等々のことを考えていくと、問題解決型の学習にいちばん即して、予想しようということからはじまって、自分の予想が本当に実験でそのとおりになっているかどうか、なっていれば喜びにつながって、子どもたちの学習意欲を掻き立てていく。そういったスタイルになっている教科書がいいので、教育出版がいいのではないかと考えています。

ただ、東京書籍か教育出版か、なかなか判断しづらいところですが、先ほどお話ししたように、あまりコロコロ変えるというのは好みませんので、教育出版でよからうと考えています。

委員長 はい。ほかにご意見をどうぞ。

大蔵委員 ほかの教科書について全部共通の話をしましたので、教科書に共通していることをちょっと言いたいです。結論から言いますと、私は大体少数意見で、今まで採択しようという教科書について、積極的にそれは賛成していないのです。しかし、これは教育出版がいちばんいいと、

珍しく私は、教育長と同じ意見です。

いちばんよくないのは学校図書で、学校図書にもう少しお考えを改めていただきたいと思うので、言っておきたいと思います。表紙について、それぞれみんなイラストがありまして、東京書籍の場合は、裏表紙に非常に細かい目次がありまして、索引代わりに使えるので非常に面白いです。それ以外は、普通のイラストでやっているのですが、学校図書だけは違います。

3年生については上、下がないのですが、4年生からは4の上、下、5の上、下と2冊に分かれています。学校図書は4、5、6年も1冊です。そういう点では、ほかと変わっています。そして教科書の表紙に、2人ずつ科学者が出ています。これもほかのイラストとは違って、人の顔を出してやっているのが、なかなか面白い企画だと思うのです。

ところが、3、4、5、6年で4冊ありますから、2人ずつで8人出てこななければならないのに、そうではないのです。ファールブル、ガリレオが2回ですから、全部で6人しか出てこない。どうしてファールブル、ガリレオを2回出さなければいけないのか、ほかに科学者はいないのかというと、たくさんいます。それはキュリー夫人や発明家ですがノーベルのような人もいるし、ずっと古く言えば、アルキメデスなどもいるわけですから、取り上げる人物はたくさんいると思いますが、その中でファールブルとガリレオは2回出てくる。ガリレオの場合は天文学者であり、それ以外のことも、望遠鏡や振り子なども有名な話でありますから、ガリレオは2回チャンスを与えてもいいかもしれませんが、ファールブルについては昆虫だけです。2回出す必要は全くない、どうしてそうなるのか。私は芸がないのではないかと思うのです。

表紙の絵なんて大したことではない、中身が大事ではないかと言われるかもしれませんが、神は細部に宿りたもうという有名な言葉がありまして、細かいことまで注意を払わないところは、大きなところで必ず間違ふことになります。だから、学校図書もやるならばそういうふうにし、表紙の場合には解説が付いているのですが、ガリレオについて2回出すならば、片方は振り子の所、大きな所で火をつける時に揺らいで、これで振り子の原理を発見したことがありますから、それならば、その次のガリレオの時には天文をやったとなればいいわけですが、どちらも同じ解説が続いているのは全く芸がない。非常に面白いアイデアですが、それを生かすような工夫を是非、この次にはしてもらいたいと思います。

委員長 教育出版というお話ですが、いかがですか。ほかにご意見ございますか。

理科の場合でお話がありましたが、教材が手に入るのかというのも、深刻な問題になってまいります。全部が室内だけの実験ではありませんし、フィールドでの調査が必要になるといった点でも、見る視点が出てくるわけですが、現行のものもそういった面では問題ないです。

また、高学年中心に、現在使用されているものより、もっと補充をされてきていること。それ

から、内容的なものについても、いろいろ区民からアンケートをいただいておりますが、天然ガスの自動車というような形からすぎ丸君もあって、是非これを使ってくださいというのも目にいたしました。全部で 158 件のアンケートをいただいているのですが、いろいろな視点からいただいております、そういった一部も見られるということです。

理科については、教育出版にしたいと思いますが、よろしいですか。

(「異議なし」の声)

委員長 次に、生活に移ります。ご意見をお願いします。

安本委員 生活科は、単純に社会と理科を足した科目ではないと思います。小学校に入っていちばん基本となる幅広い内容の、初めて出会う教科であるように思います。まだこれは始まって 10 年ぐらいだと思うのですが、自分と学校や、地域や家庭や自然、周りの関わりに関心を持つ役割の科目ではないかと思っています。例えば、外へ出てまち探検をしようとか、こういうものを作って遊んでみようなど、いろいろなものが写真やイラストで豊富に載っている教科書がいいのではないかと思いました。

大日本図書は、いま杉並区で使っている教科書なのですが、以前と比べて量が多くなって、季節を追った内容で、編集がとて面白いと思います。道具の使い方や工作などに細かい図を使った説明があって、分かりやすく丁寧で、前よりも見やすい印象を持ちました。

ただ、いまこういう時代でいろいろなことが言われているのですが、刃物などの使い方、これは家庭での教育という部分も大きいとは思いますが、教育出版だけが付録の生活図鑑の中に、刃物の扱い方や注意を具体的に載せています。生活図鑑というのはとてもよくて、身に付けたい基礎や基本的な内容が、まとめて書いてあるのです。わかりやすいきれいな、かわいらしいイラストが描いてあって、安全な歩き方であるとか、人と話す時のマナーなど、ある意味家庭でという範疇なのかもしれませんが、人との関わりを持つという科目というところから考えると、よろしいのではないかと思いました。

大藏委員 これは 10 社あるのです。新しい教科だから、たぶん参入してきたところがあって、他の教科はだんだん淘汰されていって、5 つか 6 つになっているんだと思います。ずっと通して読んで、図工、音楽は違いますが、それ以外の教科書の中で、いちばん何か要領を得ないと言うか、読んでいてあまり面白くなかったのがこの生活科でした。いろいろなものが混ざり込んでいて、はっきりしないのです。

それから、特徴的に言うと一橋出版と光村図書は、縦書きなのです。右から開いていくようになっているのです。ところが、これは春・夏・秋・冬の季節の変化があって、そこで何をしていたかをずっと記録していこうというのがあるのです。そういう考え方からすると、やはり横の

左から書いていったほうが書きやすいです。杉並区ではありませんが、一橋出版や光村図書を採用なさっている学校に、右からの部分の特徴が何かあるかを聞いてみたい気がします。あえて、この2社が縦書きをやっているのはどういうことでしょうか。非常に不思議に思いました。

これは前に、杉並区の何かの時だったのですが、鈴虫などはそんなに簡単につかまえられるのか、と私は言ったことがあるのですが、そういう中に出てくる虫なども、微妙に違っていたりします。草花や何かでもそうです。どれがよくてどれが悪いのかわかりませんが、ただ編集上、縦書きは難しいのではないかと、秋から始まっていく教科書はやはり難しく、季節であれば、春から冬の終わりで1冊終わるほうが素直ではないかと思いますが、なかなか判断に苦しむところです。

宮坂委員 内容を正直に言いまして、これがいいとあまり自信を持って言えるものはないのですが、ただ東京書籍、大阪書籍は版が大きいので、使いにくいのではないかという感じがしないでもないです。私は、教科書に絵などを載せるのはあまり好きではないので、やはり教科書というのはあくまで教科書です。ただこの生活は、低学年を対象としていますので、子どもの興味を引くことも必要ではないかと思えます。そういう面でも、わりあい写真が大きくてシンプルで見やすいという意見もありまして、現行の大日本図書でよろしいのではないかと考えております。

ただ、私は気がつかなかったのですが、安本委員から教育出版には刃物やナイフの使い方が出ているということですが、これは非常にいいことだと思います。本来は、これもやはり載せてもらいたいので、それでちょっと私も迷ってしまったのですが、やはりいま1、2年生対象で、幼稚園でもそうですが、危ないからナイフを持たせない、ハサミを持たせないというのは、子どもの成長に対して、使い方のマナーとか、使った時にふざけたりしてはいけない、友だちに向けてはいけないこと、これはむしろしつけの分野になるのではないかと考えておりますが、こういったものを生活で取り上げて、先生の管理の下できちっと使い方を教えることは、非常に大事なことだと思います。そうしますと、では教育出版のほうがいいのかと言われてしまいますので、ほかはよくわからないのですが、バランス的に調査委員会の報告でも好評でありますし、いま使われているものですから、大日本図書でもいいのではないかと考えております。これも固執はいたしません。

教育長 生活科は、本当に中途半端な教科ですね。どうしてこういう教科が出来上がったのか、文部科学省の方々にも考えてほしいのですが、そういう意味で、大日本図書の上巻、下巻の1学期が、自然体験、自然学習が中心になってしまっているのです。これは、小学校1、2年生に秩序や他者との関わり、こういったことを生徒に教えることの難しさ、それは各学級指導の中でなされることがベースにあるかもしれませんが、なかなか難しいということを感じていて、どちらかというと自然体験中心型、まちの観察を含めて、そういうことになってしまった。生活科

の授業が遊びの中でいろいろなことを学ぶ、その素材を提供するという色彩が非常に強くなってはいないかということを感じています。

そういう中で、10社ありますが、どうしても社会科、理科が地域性が出るのと同じように、やはり教員のほうで6、7歳の子どもたちをどう指導するかを考えると、日々子どもたちが接する素材が豊富にある、そのことが前提だと思うのです。そういったこともベースにしながら考えてみました。

東京書籍はイラストが本当にたくさん用いられていまして、それは子どもたちにとってみれば非常にいいのかもしれませんが、小学校1年生の子どもたちは、ワッペンなどを10個見せると、目を輝かせてどれを選ぼうかと1分も2分も悩むのです。いろいろな行動をしている子どもたちがいる時に、イラストを安易にパッと見せてしまうと、関心が分散してしまって、授業が非常に成り立ちにくいのではなかろうかという、そういう指導上の難しさを感じました。そういうことでイラスト、あるいは写真は、すっきり用いることが前提であろう。好みの問題ですが、学校図書や教育出版のほうが、子どもたちの関心が分散しにくいという分だけ学びが成立しやすいかなという感じを持ちました。

現在は、大日本図書を使っているわけですが、自然体験が中心だということ、どう各学級活動の中で指導、フォローしていくかを含めて、教材として使うことを前提にして考えますと、大日本図書、学校図書、東京書籍の3つから選択していくのがいいのかなと。なかなか絞りきれませんが、いま使っている教科用図書のほうが、先生たちにとっても使いやすいのかなと思いますので、あえてここでは、大日本図書を引き続き使うことでいかがかと感じています。

教育出版の場合、先ほどご指摘がありますように、下巻は1年生の2学期から使うことになっているのです。子どもたちの心理からしたらどうでしょうか、学年進行時に合わせて教科書が変わっていくというのが、いちばんすっきり子どもたちに受け入れられるように思うのですが、供給元の出版社からすると、教科書の配本時期と合わせるのだという意図がおありのようですが、そこまで、子どもたちのことを考える必要もないのかとっていて、やはり学年が改まる時に教科書も改まっていく、それが若年の子どもたちの立場にとってもいいのではなかろうかと、その点は考えました。

委員長 いろいろご意見いただきました。10社という話がありますが、厳密に言えば9社です。信濃教育会出版部は私どもの手元に見本本が来ていませんので、これは対象外となっていて、9社の中でどれを選ぶかです。

本当に悩むわけですが、教育出版など、いま教育長が言われましたように、子どもの気持から見た場合に2冊あって、子ども心にどういうふうを使うか、大人とはちょっと違うように心情的

に受け止めました。現状より、全体的に内容をより詳しくされた大日本図書、これを推したいわけですが、いかがですか。よろしいですか。

(「異議なし」の声)

委員長 それでは、生活については、大日本図書ということにいたします。

次に、音楽に移ります。

宮坂委員 音楽は3社なのですが、一応どの教科書もどんな曲が載っているのかなと最初見たのですが、非常に選曲のバランスはどれも結構です。日本の歌は、どの程度載っているのかなと関心を持って見たのですが、昔からの童歌、日本古謡、それからかつての文部省唱歌、それに現代の歌などが選曲されて、どれも甲乙付けがたい印象を受けました。また音楽は、歌う・楽器を奏でる面と、鑑賞の両方の面がありますが、このバランスも比較的よく取れていると思います。

調査委員会の報告書を見ますと、教育出版のほうは内容が高度である。東京芸術社は、合唱に比べて、合奏の扱い方が少し軽いのではないか、楽譜がシンプルであるというやや批判的な意見もありますので、それであれば使いやすい東京書籍でもいいかなと思います。東京書籍が無難かなという感じはします。

これはどの教科書がいいということではないのですが、どの教科書も、昔我々が子どものころに習ったのを、歌詞を変えてあるのがあるのです。どれがどうだとは全部はわかりませんが、私が気がついたのは、例えば、「白地に赤く」という『日の丸』という歌があります。これは3社ともみんな載っていて、やさしくていちばん覚えやすいのですが、ここに「ああ美しい」とありますが、我々はたしか「ああ美しや」と覚えたように記憶しています。

それから『春の小川』で、春の小川は「さらさら行くよ」とありますが、これは昔はたしか「さらさら流るゝ、そんなようなものがいくつか目についたので、これはたぶん、文語調の言葉、いま歌いにくい、使わない言葉を易しくしようという意味だろうと思いますが、これは本当は音楽ですから、情緒、感性という意味では、やはり原文を大事にすべきではないか。作詞家の気持ちというのもありまして、やたらに変えるのはいかなものかという考えを持っています。

ただ、これだからどうということはないのです。ただ、これも徹底していないので、例えば童歌で「とおりゃんせ」というのがありますが、あれは「とおりゃんせ」なのです。「通りなさい」とは書いていない。これは極端な例ですが、もし「通りなさい」にしたら、この歌のイメージ、この歌の情緒・感性というのは、完全に壊れてしまいます。このように方言的なもの、あるいは昔の言葉、そういったものはわからなければ先生が教えればいいのか、これはやたら直すべきではないと思います。

それから、言葉でも使われないものがあるのです。『我は海の子』で「とまや」って何とか、『鍛

治屋』という歌があったかどうかわかりませんが、「ふいご」という言葉は、おそらくいまの子どもはわからないと思います。これは変える必要もないし、先生が教えればいいのであって、やはり音楽というのは芸術ですから、感性というものを大事にしたほうがいいと思います。

ただ、これはいまの教科書採択にはちょっと関係ないので、私の個人的な考えです。ただ、いわゆる昔の歌もバランスよく載っているという意味で、やはりいまの東京書籍で私はよろしいのではないかと考えております。以上です。

委員長 他にございますか。

大蔵委員 たくさんの歌が入ったのですね。先ほどおっしゃったように日本の歌が復活して、入っています。ただ、言葉を直したのはもう何十年も前の話で、「さらさらいくよ」になったのは30年ぐらい前か、そのぐらいなのです。だから、もはや私は抵抗はしないという気持ちです。

たくさん歌を入れたのはいいのですが、そのために途中省略がある。例えば、教育出版の「森の熊さん」という歌。これはいろいろ話がずっと続いていくのです。それを途中でプツッと切って、3番ぐらいで終わっている。これはやはりフラストレーションで、物語みたいなものだったら、やはり全部歌詞を入れてしまったらどうかという気持ちを持ちました。

しかし私が、この音楽の教科書でいちばん言いたいことは、これは文部科学省に言うのですが、学習指導要領の中に「君が代」を全部入れなさいということになっているようで、1年生から6年生まで全部、いちばん終わりのページか、その前の辺りに「君が代」。私は、ばかばかしい話だと思っています。国歌としての「君が代」を歌うということは法律で決められている。だから「君が代」を歌う。式の時にも歌う。それは私は結構だと思います。しかし、それは1年生の時にちゃんとやれば、これは覚えてしまっただけでずっとやれることであって、音楽の教科書の1年生から6年生まで全部入れなければならない、ということも文部科学省が縛るのは、私はナンセンスだと思います。1年生でしっかり覚えて、そして後は、何かの時に歌えば忘れるものではありません。そんなに難しくなく、他の国の歌詞に比べれば短いし、非常に単純です。そういうことからすると、私はこれを縛るのはよくないと思います。

これを外すと、たぶん教科書採択、教科書検定に通らないだろうと言われているようですが、私はそれなら文部科学省にやめてもらいたいと思います。

もしそれなら、日の丸は社会科の全部の教科書に入れるのかと、そのようなことを考える人はいないでしょう。だから、その「君が代」の扱いには非常に困って、ある学年では歌詞の解説をして、ある学年では器楽演奏でどうするかというようなことで入れたりしていますが、それは苦し紛れに「君が代」を載せなければならないから、教科書会社が苦労しているのであって、そんな苦労をされることはないとは強く言いたいです。

宮坂委員 いまのご意見に、私の感想を申し上げます。国歌ですから1年生だけでいい。これは学習指導要領にありますから、一応載せなければならないのかもしれませんが、私も基本的にきちんと覚えれば1カ所でいいと個人的に思います。

ただ、載せる場所が、たしか東京芸術社はいちばん後ろなのです。あとは後ろから2、3ページぐらい。やはり国歌ですから、いちばん最初にやるなら、いちばん最初のページにきちんと載せるのがいいと思います。

ただ、一つの歌として教えるのであればどこでもいいのですが、それなら、かえって逆に毎年同じ歌を教える意味がないし、確かに無駄だと思います。

大藏委員のように全部載っているということ、私はそこまで考えなかったのですが、ただ、載っている場所がずいぶん後ろだなというイメージは受けました。もちろん1カ所でも、きちんとされていれば国歌ですから、それは結構だと思います。

委員長 全体的にいかがですか。

安本委員 東京書籍の教科書が、いちばん見やすくよかったと思います。私は歌が好きなので、歌いながら教科書を見ていたのですが、歌えない歌は一つもなかったし、みんな知っている曲だったので、なかなかいいなと思いました。子どもにもそういう歌を知ってもらったらいいなとも思いました。

総合的な学習の時間とか、平成12年からですから、ずいぶん定着しているのですが、音楽だけでなく、身近な物を使って楽器を作るとか、そういうところに繋がっていくような部分があったので、東京書籍はなかなかいいなと思いました。

教育芸術社はどちらかと言うと高度な、難しいものが多いなと思いました。

教育長 東京書籍か教育芸術社か迷うところですが、東京書籍は、3年生から学習指導要領外の内容がありますが、量的に少なく、非常に標準的なテキストだと思いましたし、何よりも他の2社と違って、民謡、童歌を含めて、日本の楽曲が大変多いですね。

やはり日本語といいましょうか、例えば2拍子なら2拍子、4拍子なら4拍子、8分の6なら8分の6という、その強弱に日本語を乗せていくということが、音楽で学ぶ日本語のリズム感だったり、メロディー感だったりするわけですから、そういったことをふんだんに聴き、または自分で歌うという機会がいちばん多いのが、東京書籍だと思いました。

教育出版は、楽曲関係の資料が本当に充実していると思いました。構成も全体的にわかりやすく、すっきりしているように思いました。ただ教育芸術社は、いまお話があったように、内容が多少高度と言うか、発展的学習と言うか、学習指導要領外のところで、イ長調とか、調性が出てきたり、付点八分音符の学習をやったり、確かに小学校の課程でそういうのが付いたものをあ

えて歌うのかな、というのはちょっとわかりません。内容もそうですし、何と云っても学習、この学ぶ目標がそれぞれ示されていて、動機づけがはっきりしているなということを感じました。

これは編集者について感じたのですが、東京書籍は三善晃先生で、教育出版が湯山昭先生で、教育芸術社が畑中良輔先生という、いずれも杉並区民の名立たる先生が編集しておられて、こういう先生がやるのだから、3分の1ずつ学校でこれ使えあれ使えとやるのがいちばんかなと思いましたが、どれか1社に絞れということになると、やはり標準的にいろいろな楽曲を子どもたちが学べる、そういう教材という意味合いからすれば、東京書籍のほうがいいかなと、これは比較的な話ですが、積極的にそう思いました。

委員長 わかりました。先ほど区民アンケートのことを言いましたが、区民アンケートでもいちばん多かったのが東京書籍です。皆様方が言われたように、名曲が多くあって、音の繋がりがよい、という意見をかなりいただいております。私自身も、構成がいちばんいいのかなと思っています。東京書籍に決めさせていただいてよろしいですね。

(「異議なし」の声)

委員長 では、音楽は東京書籍にします。

では次に、図画工作に移ります。

大蔵委員 図画工作についても、私は自分の思い出と言っても小学校に入ったのはもう大昔なのですが、しかし図画や工作に教科書を使ったという記憶がないのです。でも、あったのでしょうか。ですが、実際には先生がいろいろな物を持ってきて、「これを写生しなさい」みたいなことをやったり、学校から校庭に出て、外でいろいろな物を写生したりして、それから時々、先生がいい絵を持ってきたりして見せてくれる。そういうことで、私は教科書の記憶が非常に薄いのです。だからよくわかりません。この教科書を見てどれがいいというのが、なかなかわからないのです。

ですが、魅力ある表紙として、私は開隆堂が最も魅力的だと思います。これは非常にダイナミックです。テーマを作っておりまして、1年生はクレヨン、その次は粘土と、そういうふうに絞っているのです。そういう点では、表紙の魅力で開隆堂が非常に面白かった。

他のところの内容については、それぞれいろいろな物の作り方やら、絵の描き方やら、鑑賞方法がありますが、こういうのは教科書って要るのかなと。どちらかと言うと、そういう考えで中身についてどれがいいということはよくわかりません。

委員長 他にございましたら、お願いします。

教育長 率直に言うと東京書籍は、図画工作ということと言うと、工作、物作り思考がかなり強く出ているのかな、ということを感じました。要はテクニカルな手順を示していて、何かを作っている、粘土細工にしても、ダンボールで何かを作るにしても、考えながら作業をする手順が、か

なり具体的に示されていると思いました。

それから開隆堂は、いま大藏委員がお話になったように、各一冊ごとに独自のテーマを持っていて、教科書を見る子どもたちにとってみても、動機づけになると思いましたし、各一冊ごとに道具箱があって、その使い方もかなり細かく説明をされていて、しかも取扱いの注意にも触れて、かなり丁寧に説明がなされているように思いました。

それから、子どもたちの好奇心を掻き立てていくには、かなり効果的なテキストでなかろうかという具合に感じました。

それから日本文教出版にも、各一冊ごとに独自のテーマが設けられていて、「工夫」、「振り返り」という欄があって、学習の進め方を補助的に示していて、指導上も使いやすいかなという感じがありました。ただ全般的に、造形、物作りの色彩が濃くて、中学校に行くと美術ということになるので、何かを感じて、それを形にしていくという、そのストーリーが全体的に稀薄だったように思います。とりわけ小学校の高学年。つまり、思春期になりかけている子どもたちが、ある物を見た時に、それに何を感じるかということも素直に育てていく、その考え方はそれぞれの教材に垣間見られましたが、やはりそういうことをしっかり支えていく図画工作の教材であってほしいという感じます。そういうことで、目標を持って、独自のテーマを持って、学習を支えていくということをしっかり示したのは、いま使っている日本文教出版かなと思っておりまして、この教科書を引き続き使っていったらいかがかと思いました。

委員長 他にありますか。いま日本文教出版というふうに伺っているわけですが、東京書籍は、構成が多少単調ではないかと思えますし、開隆堂は雑然としている構成になっています。その点、日本文教出版のほうが優れていると思えます。日本文教出版にさせていただいて、よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声)

委員長 では、図画工作については日本文教出版といたします。

次に家庭です。2社ございますが、ご意見をよろしくお願いします。

安本委員 家庭科の教科書というのは、それを見て黒板に向かって勉強する部分と、実技の部分とに分かれると思うのですが、日常生活に必要な基礎的な知識を身につけること、技術・技能を見につけることができればいいなと思いました。

そういう点で開隆堂ですが、見開きのページが大変有効に使われていて、見やすい、わかりやすいということと、説明が大変丁寧だと思いました。あと郷土料理みたいなものがいくつか紹介されていたのですが、東京に住んでいて、あまり山梨のほうとうがどうかと思うこともないでしょうし、そういう意味では、そういうものがあるという一般的な知識としてはいいかなと思

ました。

あと東京書籍ですが、東京書籍はこの家庭科の教科書だけではなくて、いろいろな教科書で環境について多くの部分を割いています。家庭科もそうになっています。自由研究の例がすごく多くて、それをやるかどうかは別として、こういうものがあるという手立てにはなると思いました。

これは私の経験というか、私はそうだったのですが、縫い物というのは、先生が黒板に書かれたりしても、なかなかよくわからないのです。細かいところが、玉止めとか、玉結びとか。そういうのが東京書籍は、割合大きな写真で丁寧に説明してあったので、そういう技術的な部分に関しては、東京書籍の写真のほうがわかりやすく思いました。

ただ、男の子も女の子も学ぶわけですから、そういう意味でもバランスがいいと言うか、それはやはり東京書籍のほうだったなというふうに、見た感じでは思いました。

宮坂委員 私も調査委員会の報告をいろいろ拝見して、教科書も実際に手に取って見たのですが、確かに開隆堂は内容が論理的にまとまりすぎている。全般的には東京書籍のほうが、学習内容を押さえやすく、また環境についても単元として取り上げている。非常に好評でもあるので、東京書籍でよいと思います。

ただ、私が少し心配したのは、東京書籍はちょっと版が大きいのです。これについてどうかな、扱いにくいかな、と思ったのですが、ランドセルに十分入るし問題はない、別に扱いにくいことはない、という現場の意見があれば、東京書籍でもいいのではないかと思います。

できれば本当は、教科書の大きさというのは統一したほうが、いろいろな面で扱いやすいのではないかというのが、私の個人的な考えです。この辺がちょっと気になりましたが、内容的には東京書籍のほうが比較的好評ですから、よろしいのではないかと思います。

委員長 大きさとして、ランドセルに入るのですか。

宮坂委員 十分入ります。それは確認しました。

安本委員 東京書籍はすごくいいのですが、他の課目、他の会社、他の教科書もそうなのですが、わりあい教科書に書き込む部分というのが多いように思うのです。特にこの家庭科の教科書は、予定とか、どうなったかというのを、こんな大きな余白があって、そこに書き込むようになっているのですが、私の感覚から言うと、教科書に何か書くというのはあまり馴染みがないというか、私も教科書は大事にきなさいという時代に育っているので、そこはもう、今はそう教えるのですか。ノートを取るということがあまりないように思うので、それが中学校などに上がると、ノートを取るのをすごく苦手とする、ただ黒板に書かれたことだけを書くというような状態を生んでいるのが、この辺りに原因があるのかなと思いました。特にこの家庭科の教科書は、東京書籍は書く部分が多いです。

大蔵委員 それはよくないですね。私は、教育委員会のホームページに書きましたが、先進国の大抵の教科書というのは、無償交付ではなくて貸与なのです。何年間も使うようになっています。だから、イギリスは教科書というものがもともとないのですが、教科書的に使われているものには名前を書く欄がずっとありまして、それで一人の人が書いて、次の年は別の人が書く。使ったら学校に返しますから、ずっと名前が書いてあるのです。だから10年ぐらい経つと、上に9つぐらいの名前が書いてありまして、場合によっては「ああ、誰さんが使ったんだ」と、地域ですから知っている名前も出てきたりします。そのようにして使っていく。

だから、教科書を非常にきれいにみんな使います。そして、返さなければなりません。誰が使ったかは教科書に名前が書いてありますから、前の年に書き込んだかどうかはわからないけれど、何年かの間、誰がそこに書き込みをして、悪戯書きをした、汚した、というのはわかるようになっています。だから絶対に教科書には書き込まなくて、ノートに書く。ノートに書くことによって、やはりいろいろ覚えたり、整理したりすることができますから、先生はそれを教える。

これは前回の教科書採択の時にありましたが、紙がツルツルしていて、これは書き込みをしにくい、というのが先生から出てきました。私は本当に驚きました。だから、そんなのは教科書に書かせようというのではなくて、「ノートにちゃんと整理して書くんだよ」ということを、ぜひ指導室でも指導していただきたいと思います。だからそうだとすると、それはよくない教科書だと思います。

それから大版については、私は他のところでもたくさん教科書を見てきましたから、大版についてのコメントがありましたが、私は、大版にはそんなにこだわることはないと思います。大体、前回の教科書採択の時に、社会の教科書でも、全部大きな版だった。だからこれは、やはり一般的な傾向だと思います。いろいろなものを盛り込んだり、きれいにしたりするので版は大きくなっている。だからその傾向は避けられない。たぶんこの次の時には、開隆堂だって同じように大版にしてくるのではないかと。大版のほうが魅力がありますから、大版はそうでもありませんが、書き込みが多いというのはよくないですね。

安本委員 先生からお話を聞いた時、教科書に書くということをよしとおっしゃる方もあるし、絶対駄目と思っている方もあると思うのです。だから、どうも教科書がそういうふうになってしまうと、もう「書いていいよ」というようなイメージで、私は取ってしまったので。というのは、やはり今の子はノートを本当に取れないです。私はすごくそれを感じているので、ちょっと申し上げました。

大蔵委員 算数の教科書などでも、 $3 + \quad = 8$ とあって、5を書けるようになっているのですが、しかしその \quad は、考え方のためであって、そこに5を入れて書き込むためではなかったのです。

だから、そういう意味で、考え方を誘導するための があるのはいいですが、そこに書き込んで完成するようにしなさいみたいな誘導だと、非常によくないと思います。

教育長 いまミシンのないご家庭というのは、あるのでしょうかね。もし、そういう家庭もあるということをお前提に考えたのですが、その構造を示すのがイラストなのですね。本当に生活を支える、そういう用具というのは、現物をありのまま構造的に見せてあげるのが、やはり家庭科の仕事だろうということを感じています。

そういう中でも、この2社を比較すると、先ほど安本委員が指摘しておられたように、イラストより写真を用いて、そのもの、現物をきちんと見せようという姿勢は、東京書籍のほうが強いと思いました。

つまり、わかりやすさ。教える指導者も、「これですよ」と言わなくても、同様の過程を子どもなりに理解できる。その理解を支えようとする姿勢は、2社を比較すると東京書籍のほうが高いと思いました。

それから、21世紀の大問題である環境リサイクル。そして食育。こういったことの取り組む姿勢も、東京書籍のほうが強いと感じました。これは比較の問題ですが、やはり総じて2社を比較すると、東京書籍のほうがよろしかろうと思いました。

委員長 わかりました。家庭科というのが概念的に、ずいぶん以前と変わってきて、どうやって正しく生きていくのか。それで、総合科的な色彩というか、そうなっているのかなと。

それで、東京書籍は生ごみとか、エコクッキングとか、環境問題にしても、姿勢、そういったことへの解決というきっかけになればということで、精力的に書かれていて、これが売りものになってきていると思います。

皆様方、東京書籍ということですので、よろしいですか。

(「異議なし」の声)

委員長 では、家庭に関しては東京書籍に決めさせていただきます。

最後に保健に移ります。ご意見をお願いします。

教育長 総括的に3点、それから個別にお話をさせていただきます。この保健分野は5社の構成、それから該当ページ数、これがほとんど同じという教科書は、他にはないと思うのです。並べてやっていると、同じページ数に、同じものが出てくるのです。これはちょっと困ったなということで、構成、該当ページ数が同じ。内容的にもそれぞれ工夫しておられますが、本当に似たり寄ったりです。どれを使ってもいいのかな、ということをお思いながら、見させていただきました。

ただ、この保健の分野で何を留意しなくてはいけないかということで、私なりに指標を立ててみたことを申し上げますと、1つは教科書で心身、心と身体の健全な発達を学ぶ、ということか

らいきますと、きちんと自己点検、自分でチェックできるという自己点検を促すこと。それから問題発見ですとか、対処策を導く、そういうロールプレイですとか、ゲームですとか、そういった学び方を展開していくのが効果的だと思いますし、そういう教科書のほうがいいかなというふうに思いました。

それからもう1点は、健康問題。健康問題というのは、単体、一人ひとりの健康だけではなくて、自分自身の問題であると同時に他者との関わり。社会性と言っていいかと思いますが、そういう中で考えるという視点が必要で、特に高学年、5年生、6年生になって、もうきちんと自分でものがわかるという年齢の子どもたちにとってみれば、他者との関わりの中で自分の健康問題も考える、こういうことが必要ではないかと思いました。

そういう視点から、現在使っている学習研究社を見てみたのですが、例えば、生活習慣病、これが学習研究社はいちばん詳しいのです。ところが、欠点として挙げると、この学習研究社だけが死亡原因の、2002年の白書の統計表がないのです。死因はこれがいちばん多いというような、その資料がありませんので、イメージが非常に持ちにくいということを感じました。なにせ酒・たばこ・薬物を含めて、思春期に迷い込みがちなもの。それから小児成人病を含めて、生活習慣病に対する学び。それから、何よりも怪我人の対処の仕方。怪我の対処という欄がありまして、この学習研究社だけがファーストエイド、つまり、救急救命の学習について触れているのです。要は自分の怪我をどう防ぐか、自分が怪我をした時にどうするかではなくて、怪我人を発見した時に、どういう具合に対処すればいいか、ということに触れているのが、この学習研究社でした。

いま中学校の3年生に、卒業する前に救急救命の資格をみんな取らせるようにしているのですが、それとの関係から小学校6年生の中で、このファーストエイドの動機づけをしておくことは、非常に大切なことだという具合に感じました。

その他に東京書籍、それから光文書院の教科書が非常に優れていると思って、この3社で比較をしてみたのですが、現在使っている学習研究社が、私が考えた指標にはいちばん応えているという具合に思いまして、この学習研究社を引き続き採用してはと考えました。以上です。

大蔵委員 本当に全部ページ数が同じというのは不思議ですね。これだけの長さで。

だけど、いまのお話の中で学習研究社とありましたが、光文書院のほうも私はなかなかよかったですと思いました。

教育長 ええ、よかったですね。だから学習研究社か、光文書院か、東京書籍か、なかなか悩ましいところですが、大体同じ、似たり寄ったりなんですね。

ただ、その中でやはり生活習慣病、酒、たばこ、薬物、薬害に、いちばんページを割いていましたし、何と言ってもファーストエイド、救急救命の技法を、具体的に声掛けから含めて指導し

ている。これは教員も非常に指導しやすいと思いましたが、比較的に見ると学習研究社かなと、だいぶ悩ましいところですが、そう思いました。

大蔵委員 性教育の点でいろいろと苦労しているという印象がどれもあります。

教育長 各社、そうですね。

委員長 では、学習研究社との声が多いようですから、基本的な内容が押さえられているので、現行の学習研究社でよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声)

委員長 では、保健については学習研究社に決めさせていただきます。

どうもありがとうございました。これで小学校の教科書採択の審議を終了します。ここで決定した教科書を確認するために、一旦休憩に入らせていただいて、後ほど再開させていただきたいと思います。

大蔵委員 107条教科書はどうするのですか。

委員長 また後でやります。

庶務課長 では、10分ぐらい休憩ということでよろしいですか。

委員長 では、16時55分から再開ということで、よろしくをお願いします。

(休憩)

委員長 委員会を再開いたします。先ほどの審議を踏まえて、一覧表が作成されましたので、確認をお願いします。指導室長、よろしくをお願いします。

指導室長 それでは、いまお手元にお配りした資料に基づいて、平成17年度使用の小学校教科用図書、種目及び発行社について、ご報告申し上げます。

国語、光村図書。書写、光村図書。社会、東京書籍。地図、帝国書院。算数、新興出版社啓林館。お手元の資料には啓林館と記載してあります。理科、教育出版。生活、大日本図書。音楽、東京書籍。図画工作、日本文教出版。家庭、東京書籍。保健、学習研究社。以上です。

委員長 ただいま指導室長から読み上げていただいた発行社でよろしいですか。

(「異議なし」の声)

委員長 では、委員の皆様の承認をいただいたので、決めさせていただきます。

次に養護学校・心身障害学級用の教科用図書の採択に移らせていただきます。前回の教育委員会の定例会において、「107条教科書調査委員会」から、調査結果の報告をいただいておりますが、ご意見はございますか。

大蔵委員 これは、私は非常に関係があるところでして、教育委員会の中で、私は養護関係を担当しておりますので、済美養護学校にもかなり頻繁に行っておりますし、それ以外の身障者学級も

いくつか訪問しております。

これは一般の学校、普通の小学校の場合ならば、大体平均的な子どもを考えて、この教科書がいいとか、こういうことがいいだろうということを言えるわけですが、養護学校は全く様々で、その中で、養護に来ている子どもたちのレベルが非常に違います。

それから身障学級の場合なら、もっと少ないわけですが、その身障学級ごとにどういう子どもが来ているかということが違うので、私どもが普通に考えて、これがいいだろうとか、多少遅れているならこのぐらいの教科書が相応しいかなとか、そんなことは言えないのです。とてもよく出来る子も、その中にはいるのです。ある教科については普通の子、普通のところに全く負けないうように出来る子もいます。

また、これに当てた教科書というのも数がすごく多くて、先ほどのように5つとか、6つとか、絞られてきませんので、とても私どもがいまここで、教育委員の5人で考えて決めるというのは非常に難しいと思います。

それぞれのところがおやりになって、報告書が出てきている。中村先生が中心になってまとめられたものがございますので、私はそれに従って決めるのがいちばんいいと思います。だから、報告書を尊重して採択をするというのがいいと思います。

委員長 他の委員の方はどうですか。よろしいですか。

(「異議なし」の声)

委員長 どうもありがとうございました。異議がございませんので、107条教科書調査委員会からの報告どおりに採択したいと思います。

これで予定された日程は終了いたしました。

庶務課長 次回の日程について、ご案内をさせていただきます。8月11日(水)の定例会ですが、休会とさせていただきます。8月25日(水)の定例会ですが、日時を変更いたしまして、8月26日(木)の13時30分から開かせていただきたいと思います。以上です。

大蔵委員 8月は1回ということですね。

庶務課長 1回です。

委員長 ありがとうございました。これをもちまして、教育委員会を終了させていただきます。